

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰

六月號



nojit.

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

No. 361

昭和十三年六月一日発行第十二卷第六号
（第一回二日発行）
創刊大正十三年・通卷三百六十一号

山雨樓忌句會

主催 川柳雜誌社

故人を知らない方も川柳縁でぜひ御参集願います。

日時 六月七日(金)午後六時
会場 光明寺 (電話九二六〇)
大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前

兼題

「生前」 〇〇〇 麻生路郎選
「供養」 〇〇〇 橋本緑雨選
「煙」 〇〇〇 市場没食子選
「アルバム」 〇〇〇 松江梅里選

席題

三 題(題および選者は当日発表)

柳話

麻生路郎
清水白柳子

句評

★各題天位 ★路郎選天位に不朽洞賞

呈賞

五拾円

幹事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・雄雨・堰子
与呂志・白水・東洋男・竹莊・愛論・二三夫

川柳雜誌社句會部

電・住吉 六〇八一

山雨樓はこんな句を遺した——路郎

茶碗の丸さたのしみに満つ
押入のついでに拭きたかつた肺
寝て四年子規に劣らぬ痰一斗
生理めの息苦しさを肺を病めば

麻生路郎先生

古稀祝賀川柳大会

(川柳川柳まつり)

日時 七月七日(日)午後一時
会場 藤田美術館
大阪市都島区網島四〇

兼題

「友達」 岸本水府選
「若返り」 桐元紋太選
「福」 麻生霞乃選
「旅」 清水白柳子選
「私」 北川春巢選
「飲み手」 土井文蝶選
「名人」 須崎豆秋選

★投句のみの方(五十円封入(切手可))

★宛先 大阪市南区西賑町三〇 西尾 栗宛

★切 七月五日必着

呈賞 天地人入賞作(出席者に限る)

余興 講談 旭堂小南陵
舞踊 若柳 貴洲

会費 百二十円(参加者にお土産進呈)

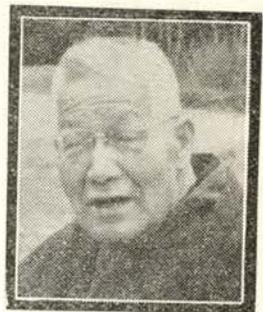
(有志親宴 五時から(散会后同会場))

会費 六百五十円 (路郎先生筆白扇子進呈)

またとない、この好機
師弟愛と友情愛に結ばれる
夢の柳宴——

予

告



南北逝く

遺言はないと云う遺言

どさがなかった。

★

食満南北(真二)氏が五月十四日に亡くなった。南北氏を知るかぎりの人たちが淋しがった。そんなことは七十八才の老人にしては珍らしいことだと云えよう。

したい事をし、云いたいことを云い、書きたいことを書いたので、したいことをしようしない人、云いたいことをしよう云わない人、書きたいことをしよう書かない人達がファンだったからであらう。

★ 南北氏は賑やかな人であった。すべてに派手好みで所謂劇作家らしい劇作家であった。よく洒落を云ったが関西の洒落のようなく

★

南北氏の宿替はあまりにも有名で八十何回のレコードホルダーだと云うことである。最後に住んでいたアパートの中でも三回かわったそうだ。気分転換がネライだったとすればうなずけないことはない。

★

南北氏を奇人だと云う人もいるが、ぞうは思えない。家の中で、素ッばばかり、一糸まとわずにいたり寒中でも足袋を穿かないでいたので、そんな点から奇人扱いをされたのかも知れないが、それは南北氏の巨体では生理的な要求がそうさせたのだと思う。

★

南北氏はなか／＼器用だった。もう少しドン臭さかた方がよかつたのではなからうかと思う。画も書も巧みだったがその書の読みにくいことと表たら有名で氏の書をうまく読みこなす人は稀れであった。原稿をかく速力の早いことと来たら、これ又氏の右に出る者はなかつた。

★

告別式の日、南北氏の遺言が発表されたが、それは口述筆記をさせたものであった。そして、ワシには遺言はないと云う遺言であったが、普通の南北氏は喰べものについて言い遺すことを忘れなかつた。うまい

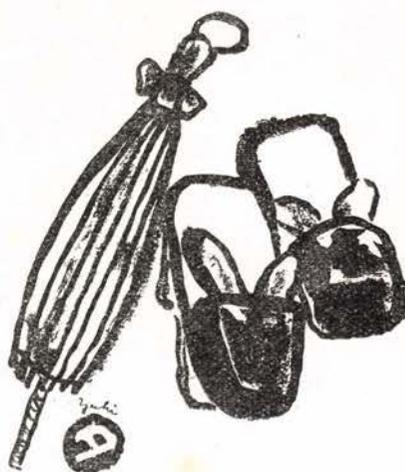
不朽洞句帖

麻生路郎

晩春の憂鬱洒落ももうきけず
宿替も今度は番地ないところ

六月号目次

題字	麻生路郎
表紙	野尻弘
不朽洞句帖	麻生路郎(三)
川柳家の二十四時	
藤井 米三・阿部佐保蘭(三)	
亀井花童子(三)	
日本人の性格	後藤 梅志(六)
売りものにされ	東野 大八(二)
た川柳	
南北逝く	麻生路郎(三)
川柳身辺記	木山 遠二(三)
新川柳鑑賞	麻生路郎(三)
川柳祭古稀祝賀	
川柳大会に就て	
異色作家を語る	北川 春果(四)
近作族は思う	河井 庸佑(三)
源 義 仲	富士野駿馬(六)
下積み時代	不二田三夫(三)
水客を語る	路郎・霞乃(四)
杜的	紫香・蘭花(四)
青ペン赤ペン	
川柳ノ連へゆく	麻生路郎(四)
川 柳 街	麻生路郎(五)
★	
川 柳 塔	麻生路郎選(六)
同舟近詠	諸
近作柳 檉	麻生路郎選(六)
	北川春果選(六)
一路集「秀才」	市場没食子選(三)
金 泥 集	黒川 紫香選(三)
各地 柳 壇	麻生霞乃選(三)
川柳第二教室	
没になつたわけ	麻生 霞乃(三)
質疑に答える	清水白柳子(三)
不朽洞会から	
柳界展望	(三)
編集録音	(三)



異色作家を語る

句集「私達」から

北川 春 巢

句集「私達」が私の手に入ってから既に三ヵ月、出版記念会が大阪観光ホテルで盛大に挙行せられてからでも、既に二ヵ月近くの日が流れた、その間、私はこの句集を何回繰返して読んだであろう。この句集ののっている句数は丁度四千三百句だと、路郎先生は書いておられる、私は句数を確かめたわけではないが、それに間違いはあるまい。あの出版記念会の席上、お礼の言葉の中で、私は約二万数千句の中からこれら四千三百句を路郎先生が再選して下さったことを述べた。再選というのは、一度「川柳雑誌」上に路郎先生選によって発表された句の中から、各自が二百句宛自選し、それをもう一度選をして頂いた、という意味である。私の言葉が足りなかったためか、祝辞の中で岸本水府氏は、柳樽初篇七百五十六句のことを持ち出され、柳樽初篇が宝暦七年から同十三年迄七年間に、柄井川柳の選をした万句会の中から、吳陵軒可有が鑑別、再選して七百五十六句を揃えて編纂されたことを述べられた。吳陵軒可有の選

率は約十句に一句位だと伝えられ、当時柄井川柳の選をしたものは約七八千句あったと云われている。その七八千句は、一般から万句会に応募したもので、中で百句に一句位の率で抜かれたもので、結局柳樽初篇の句は、千句に一句位の粒選りであるわけである。私は「私達」の句が、それ以上上へ厳選だと云っているのではないし、又岸本水府氏が、「私達」の句は、柳樽初編程には厳選でないから価値が少ないと云われた、と云っているのではない。たゞ柳樽初篇は柄井川柳が選句をした万句会のものであるに對し、「私達」は一度路郎先生が選をされたものを、同じ路郎先生が、柳樽初篇に（或は及ばぬかも知れぬが）近い率で再選されたものである、ということをもう一度認識して頂きたかったのである。

さて、「私達」を通過して異色作家を、語るのが私に与えられた課題であるが、これは非常に難題であると云わざるを得ない。第一、「私達」に顔を並べている作家は何れもそれ自身「異色ある」ものである。句は何れも所謂一粒選りの句である。のっている作品の数が少ないからと云って、その作家が下手であるとか、作品の数が多から優秀な作家であるとかいうことは、絶対に云い得ないと思う。その点では路郎先生も随分苦心されたということ漏れ聞いているから、句集にのせる句数もなるべく同じ位にしたい、と思われたらしい。然し作家にはそれ／＼個性がありカラーがある。我々のモットーにしている「生命ある句」というのは、その作家の個性の溢み出た句でなければならぬ。いかに上手に詠ってあっても、口先だけのべんちゃらが何にもならぬように、句に個性が出ていなければ、それは人間に魂がないのと同様である。路郎先生は各人の個性を見抜かれて、どんな句を削って行かれたと聞いています。そしてあのような、人によって不揃いの句数になってしまったのであるが、従って並んでいる句は、何れも異色ある句であ

って、私が特に「異色」作家だと今更ら喋々することは非常にむづかしいと思うのである。第二は、この句集に顔を並べている作家は、何れも皆、私の兄弟弟子である。路郎先生のもと、不朽洞会という一つ釜の飯を食べている一大家族である。兄貴分もおれば弟分もおるわけであるが、誰の句を取り上げて誰の句を取り上げぬ、ということも私にとっては非常に心苦しい次第である。

然し私は課題を与えられた以上、作家について何か書かねばならない。スペースの許される限り、云いたいことを云わして頂きたい。

前にも云った通り、路郎先生は各作家の個性に従って、各人の提出した二百句の中からどん／＼と削って行かれた。「私達」を手にした人は、まづ先に自分の句はどんなのがのっているだろうか、又何句ののっているだろうか、誰でも胸を躍らせながら自分の真を探したに違いない。えてして自分に自信のある句が抜けずに、自信のな

い、たゞ数の中に入れておいたような句が抜けるということは、誰でも経験のあることである。一言分しか句のない人もあるが、大体は二頁である。或は三頁、四頁の人々もある。(句集を御覧になって頂きたい)所が五頁の人がたった一人あるのである。それは西森花村氏なのだ。四頁の人は相当ある。路郎先生も釣り合いの上、何とかして花村氏におさまってもらいたいと思われたに違いない。しかもどうしても削ることが出来ずに五頁になった花村氏こそ、異色作家中の異色作家ではあるまいかと私は思うのである。そこで先ず路郎先生の此の無言のサジェストに従つて、西森花村氏に御登壇願うことにして、句集からその作品を鑑賞して見たいと思う。

氏は私も顔見知りである。年配は私よりもお若いようだが、殊更に親しく話したことがないので氏の人柄は句を通してしか分からない。どちらかと云えば句会場などでも目立たない方である。然しその作品たるや路郎先生の「川柳とは何か」(至文堂刊、学生教養新書)の中にも例に引かれたり鑑賞されたりしている句が十句もあって、光っている。次にそれを抜いて見よう。

御免ねといつて仲よし先に嫁き
怪談は不入りの方が凄く見え
何もせずじつとしてたよいレール

十二月遺憾ながらと返事が来
レニター押しこめられてお辞儀され

仲からお古をもらう年になり

間違いなやと宿題母にさし

胃が悪くかかとラジオに尋ねられ

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ

その割に葬儀屋自宅から出さず

それ／＼の句については、「川柳とは何か」の説明をお読み願いたい。

須崎豆秋氏が異色作家中の異色作家の一人であることについては誰も異存のないこととて、私は豆秋氏の作品については多言を費やさないが、氏の句に

出勤へヒヨコがすこしついて来る
というのがある。この句は、かつて問題になった句であるが、花村氏の

天と地の間をひよこ駆け廻り
も同じヒヨコを題材としたもので、やはり問題にすべき作品ではあるまいかと思う。

次に異色作家として、私は真鍋一瓢氏を挙げたい。氏は私と同じく川柳雑誌社の編集局で活躍され、口よりもむしろ手八丁の人である。年配は私よりも少々上だろうからお仕事の関係からかお年の関係からか、酒や女の句が相当に多い。

たまさかに妻いたわって疑われ
うた、寝を叱る妓は女房じみ
怨敵の如く女将はぼるつもり

飲けるんぞと年増が寄つて来る
夜業ヨセなる酒じやとて酒じやとて
女には飽いた手に持つ大ジョッキ

然しこのような酒や女の句は、或は誰にでも詠めるかも知れない。氏の真価はもう少し違う所にあるように思われる。「川柳とは何か」の中に、次のような句が例句や鑑賞に例に引かれている。

縁あって来たビヤ樽に似た女中

水族館食気放れて見て通り

けなげなり猫猫なりの身だしなみ

果物屋百匁売つても並べかえ

シグナルは青だそれ行け子沢山

背任へする／＼欲めた美しさ
さのさ節一つ唄えぬ立志伝
鬨悲しや胎児諸共食われたり

楽天家のくらはげは磯に置き去られ
しなびても土筆袴はつけていた
こんな句こそ、一瓢氏の独壇場と云えよう

次には先輩の市場没食子氏に御登場願いたい。氏は雅号でも察しがつくと思うが、お仕事は薬剤師で、某大病院の薬局長である。川柳では私の大先輩の一人で、現在不朽洞会の常任理事をしておられる。先輩のことを批判するのどうかと思うが、名作家はやはり名作家である。氏をおうて他を語るわけには行かない。毎月雑誌に発表される句を見ても、膝を叩いて感嘆せぬ句はない程である。路郎先生も「川柳とは何か」の中に、次の諸句を引かれている。

夏期講座みな居眠りに来てるよう
碧い瞳の子でも孫なり負うて出る
扇風機の代りを妻がまだつとめ
飲まされて味方を売って帰つて来
万障繰り合せてロハの席に行く

「私達」には収められていないが
もう手術室は埒子の音ばかり
の句は、経験作家の氏が、感覚の句に新生面を開かれた句として、いつかの句評にも古方氏が贅辭を惜しまれなかつたことを記憶している。

最後に、新進作家の木村水堂氏を御紹介したい。氏は年配から云えば私と余り変わらないかと思う。新進の作家と云つても、柳原は或いは新しくないのかも知れない。氏が氏に注目しはじめたのは、句会の後などの懇親会で氏が「養子」を売り物にされて上機嫌になつていられるのを何回も見せつ

けられてからである。今迄は時世のせいだったかも知れぬが、「私は養子です」と云いふらして廻る人はなかつた。たとえ自分が養子であっても、それを句に作るということは余りなかつた。所が氏は養子を看板にして、多くの句を作つておられ、それが又爽に興味深い句である。句集にのつていないが

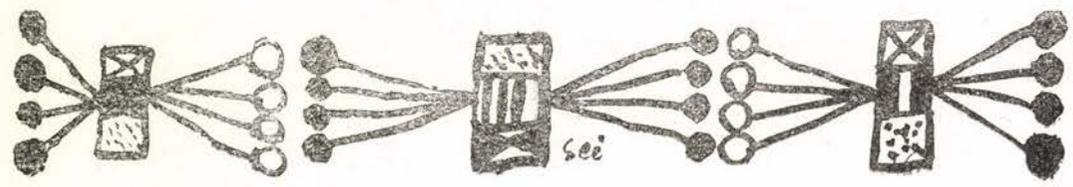
アルコール切れると養子らしくなり
の句など、雑誌に発表された時には、誰もかもウン！と唸つた程だった。その他「私達」の中には、

御本家の格で養子が座らされ
久潤の友に養子を羨まれ
御用聞き養子と知らぬ世辭を云い
聞込みと諷う養子の酒の量
父ちゃんがか叱られたのをふれ歩き
養子の悪口へ親娘の気がそろい
云い分は養子の方がたんと持ち

などの句があつて、いかにも養子を樂しんでおられるようである。家庭の雰囲気や奥さんの様子なども目に見えるようだ。違つた意味で「異色作家」と云うべきである。氏は市内の某大郵便局に勤めておられる郵政の官吏であるが、勤務もやはりこの気分で作つておられるが、句の上に見えて、局長が好きだからする野球なり
免職にならぬ程度でくだを巻き
メーデーに参加もせずにパチンコ屋

骨のあるところを見せて誠になり
俵給の高い順から出張し

氏は下積みの役人として、不平不満を句に吐き出すことによつて、それを忘れようとしておられるに違いない。路郎先生のいわゆる「人格の陶冶」とはこのことである。氏がこそ生れながらの川柳人である、という気がしてならない。



川柳塔

去阪市 中島生々庵

退きぎわの良さに取り巻き惚れなむし
酒のまぬ丈が會長玉にきす
はからずも等とやきもきしたくせに
生酔いが70円を待つて乗り
就職難山下清をけるがり

次男の大学入学を喜びて

豊中市 戸田古方

つりビラで鼻かんでいた終電車
ニュース解説知らん単語がまたふえた

去阪市 西尾 葉

へらへらへらと言葉の通り泳ぐ鳥賊
菜の花の中の工場は閉めてあり
養子のコツで市会議員が勤まって
団体の赤いリボンも春のもの
お向いと話してお隣りに始かれ

西宮市 若本多久志

俳句ならわかる妓でうまが合い
金一封二号あつさり会者定離
よそ様の二号も女房よく云わす

新発田市 高沢一浪

これも試験さと女に逃げられて
この仲居俺の月給ほどもとり
老人と云われてみても逆らわす
電化してみたが坐って飯を食べ

オムル市 内藤草一郎

口下手なことも可愛いもののうち
失恋のそれから靴は磨かれず
ナフキンへ書かれた地図の入れどころ

東京都 宮田不二

寒いわけラジオでお水取りを知り
募集々々何んや園児のことかいな
幸福な枕カバリの白い日日

去阪市 須崎豆秋

奥さんが待つてまっせとみをつくし
誰も居ぬ部屋にラジオは浪花節
明治生れだんね屈い手おまへんか
終点であしんどとも云わぬ汽車
ノイローゼだよと博士は見てくれず

去阪市 正本水客

春風へ前坐話いたのしくて
褒めようがなくて内助の功と云う
裏街も水が流れて京に住む
京みやげ春の香のするものを呉れ
高台寺萩なつかしむ人と佇つ
おいしいと云わない人と妻悟る
見送ったふんいきのまゝ喫茶に居

去阪市 丸尾潮花

寝転んでみても虚無にはなりきれず
女房でも色でもないに連れ歩き
珠数バラリ子に面白く切れて落ち
パチンコのリズムに背なの子も馴れて
送る気の女肩かけ取りに立ち

去阪市 北川春巢

小姑のシア／＼としてまだ嫁かず
不義の子の処置は女の方がつけ
旅にあれば五円硬貨も用多し
足弱も同んなじように足を組み
大連れるようなものだを孫を連れ
ストリップ誘えばあんなものと云う

東京行医学会出席

学会は眠り銀座は目を見張り
ストにも遭わす東京から帰り
幸運は富士山に雲一つなし

下関市 桜川不水

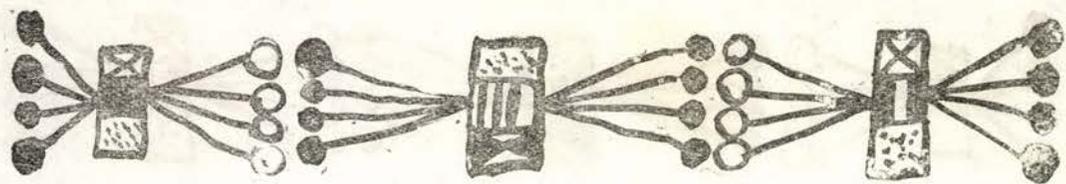
よだれ拭くにも愛妻のお手をかり
チャンバラが堂に入つて男の子

岡山県 浜田久米雄

内祝久しい筆をかんで書き
大火ひんびん春が過ぎ逝く
くちびるをかんでいのちの匂を探し
春うららすこうし肥えた頬をなで
定員がどうのこうのと煙草の輪

出雲市 尾緑之助

町内の世話一年がすんだ酒



扇雀来たる田舎の春を浮きたゝせ
だまされる事にも慣れてとはさみし
汚職でもやれとコップに注いでくれ
へとち老へ

閉居また夢も新たに緑して

大阪市 水谷 竹 莊

後釜の話法事の席です

新婚の間爪まで切つてくれ
けちんばは女難の味も知らず老い

兵庫県 小西 無 鬼

拾つたとなれば一円も尊し

旅

本洲と云えば大きう聞えける

へさきに立てば東郷さんの氣持する
ゴミゴミとした人類の巢が並び

大阪銭湯

下駄に鍵衣類も鍵に氣が疲れ

尼崎市 小林 文 月

選曆に舞踊の姪を見直せり

満員車ガールフレンド押して乗せ

大阪市 富岡 淡 舟

巖火な男が泣けば喜劇めく

生活の事を思えば黙すのみ

山口県 長野 井 蛙

目の保養したと女の負け惜しみ

口塞ぐつもり顧問に祭り上げ

被害者に尻ぬぐわせてスト終り

働らいてさえ喰いかねるに花の下

日傭の大工は鉋ばかり磨き

呉市 林野 甞 光

關病の窓へ行楽バス続き

大阪市 松江 梅 里

ぼろくちの話の中へ蒸しタオル

キッスして舌噛み切られた馬鹿がいた

見送りを追い出すようにドラが鳴る

喰べ残し集めて母の茶漬けすみ

岡山県 直原 七 面 山

色里に来て色男もてもせず

人生の黄昏へ飲む生玉子

行く末は女医にする氣の子が肺で

にわとりが歩けば消える程の雪

鳥取市 河村 日 満

でもあるやないかと一分咲きへ立ち

景氣もうちもの女房を浮わつかせ

約束履行花見を濡れて戻らされ

ハーモニカ昔は息がありあまり

大阪市 西 い わ を

長男が戻れば妻の甲斐なくし

中年の女へ話しとき

氣狂になれるそれだけ幸福さ

岡山市 服部 十 九 平

半金を貰って仕事はかどらす

這入りよい家で空巢の鉢合せ

尼崎市 長谷川 三 司

何か喰い／＼売店はつりを出し

お年ですなどと年寄りくさい世辞

襟足を見せて二号は焼香す

スイッチぐらい直す女房へ氣が疲れ

兵庫縣 若林 草 右

体格で落ちたと近所へふれ歩き

大阪市 足立 春 雄

落第はあたりまえだと他人の子

心音橋広告マッチ丈けたまり

小さな抵抗唇をとんがらし

熊本縣 有働 芳 仙

温泉で退職金の封を切り

恋一つ終り自嘲の髪を梳き

れんげ草肥料に見える丈けの父

色氣がないとは妻へ痛いこと

才媛で嫁ぎ荊妻で逝き

教え子の若さにベッド取り巻かれ

下関市 石川 侃 流 洞

パー暗く秘密々々という如し

奥さんの必死へ亭主飲み歩き

負けてやるコップから廻り椅子をあて

広島縣 山田 季 替

停年の僕へ下つ端よるこんだ

峠茶屋バス開通へ客が減り

バスの窓海苔干す町を通り抜け

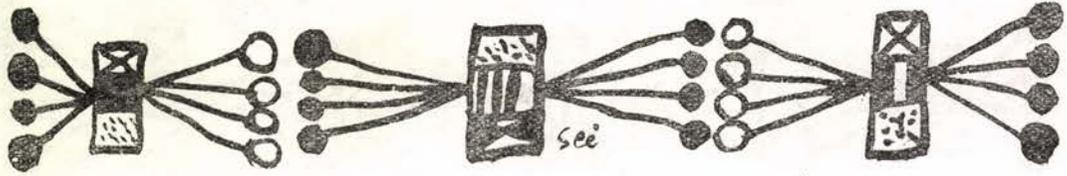
世はまさに変れど水車まだ廻り

大阪市 山本 葉 光

神さまが御ぞんじですと嘘をつき

濁る世に斗病怒りのペン握る

倉敷市 木村 千 容



礼讃の電気炬燵で赤字が出

申告へ税吏あまりにそっけなし
合併をされてもやっぱり寒村で

も一肌脱げとは女将気が強い
退院を決める主治医の政治性

倉敷市 田垣方大

あなたああなたあとハズをよく使ひ
道普請亡夫のズボンはいて出る
老妓とはあんまり飲むと云うてくれ

石川県 那谷光郎

雨宿り見事な毛脛だと思ひ
歳の鍵などは渡せぬ養子が来

春うらら不精のゴミが目立って来
霜柱朝の寒さを知るも母

石川県 野村味平

ひりひりとさせてこんにやく味がつき
情熱があつたばかりに嫉きました

大阪市 木村水堂

宝くじに希望をつなぐ暮し向き
死にたいと云うてたけれど医者迎え

堺市 八木摩天郎

就職をするのよ母が病気の
生め殖やせのおかけ入試の子がたゞり

高槻市 福田丁路

お花見を兼ねた御詠歌コンクール
税金を払いのんだり湯につかり

無作法な女ばかりの花の宴
肉体を張って職場の女王蜂

肉体を張って職場の女王蜂

仕事着のまゝで夜学へ入り込み

倉敷市 梶原一善

四十の恋はネクタイ派手にした
スタイルを云うて健康美を忘れ
冷めて見りや張り合う程の娘にあらす
御役所でどなつて胸がすつとした

お隣の派手な喧嘩に目がさめた

岡山市 田村藤波

一軒屋犬猫兎雞も飼ひ
政敵の弔辞はうわの空でき
榮転へ祝電先に来てあわて

岡山市 岡田夜潮

六十才以上の婦人同窓会に寄す
白髪染するのも阿呆らしゆうなり
哄笑へ入歯が抜けたあわてよう
選挙場婦りに靴のないさわざ

昨日からまだ一言もおつしやらす
お手玉を残して工場へ売られたり

玉島市 白井三林坊

京は雨奈良は小雨の旅つかれ
ピリの子の顔先生をきめつける
石橋をかぎ／＼牛は渡るなり

岡山県 本田恵二朗

仏壇に切腹したのもいて旧家
恐妻家足音たてぬ癖がつき

何の何の割れてなるかと云う卵
春爛漫よち／＼遊ぶ乞食の子

大阪市 真鍋一瓢

世を拗ねてまんねと衛星都市に住み
六段の調べが京の街にする
母さんのロマンス床に琴があり
竹割った様などが好きですラブレター

京都府 松川杜的

看護婦で老け文鳥を可愛がり
病氣すれば無理いうくせが子にうつり
葬式屋ほとけへ先に手を合せ
だいふんたつて耳の遠いのが判かり
みんなむりしてると話きいてる

倉敷市 藤井春日

あんたかてえ／＼人やわと来て坐り
呼びつけてクイズ問うてる課長さん
鶯が啼いてるあんま手を休め
赤飯を炊いて親方暇をやり

岡山市 津田麦太楼

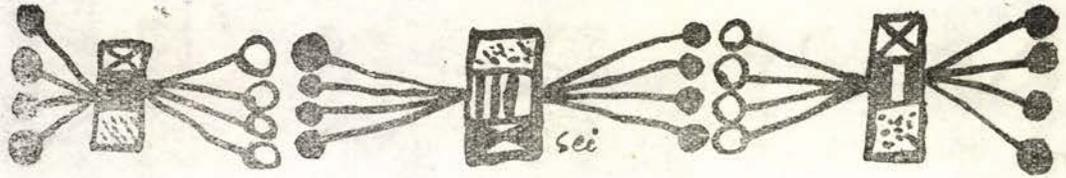
係長ともなればそろ／＼酒肥り
老の一徹腰から下がついて来す
すみれたんば／＼乳を含ますヨイトマケ
ブラットに踏み裳裾の風を嗅ぎ
禿げたのを羽搔縮して床柱

米子市 小西雄々

バイブルを読むとは見えぬケセラセラ
成績は値段と逆なランドセル
農場の専務林を切りに去に
酔どれにシヨール素早く身をかわし

吹田市 橋本幸男

吹田市 橋本幸男



口ごたえしたと主任はかんを立て
ものすごい胸毛を見せてボディビル

堺市 高崎 雄声

腰痛も夫婦一しよで仲がよし
定年後元駅長が出前もち

大阪市 森 文夫

桜散る頃にそろうた閉と金
すさまじや米買う金で競馬とは

離縁してからは笑わぬ父となり
恩返しどころか煮湯呑まされる

大阪市 吾郷 玲人

閉店のベルへ四角な陽が沈む
医者の子で何思うたか農学部

御意見は尊重します公聴課

火の元を頼んまっせと妻出掛け
三度目に行けば役所は戸が閉まり
道ならぬ恋も芽生えて春は逝く

島根県 藤井 明朗

関の宿にて

お世話しますと女将の如才なし
テープ引くしばし別れをもてあそび

岡山県 永松 東岸子

一人娘へ桐も植えとくことにする
子のつんだ「せり」晩酌に色を添え

正義派は消え去るのみと云う世相
新緑へ釣れても釣れんでもよろし

倉敷市 野田 素身郎

長崎にて

平和像ゼット機の音何と聞く
図書館で会ってスタンドで話し

一人旅やたら風景ばかり撮り
信号無視せねばあの娘の汽車が出る

ちよい／＼は異論もはさむ聞き上手

大阪市 清水 望峰

立ち呑みをくぐれば隣の人も居り
夕焼を受けてワントン路地を出る

大阪府 川端 鬼醉

うしろから帽子取れとは殺生な
目を閉じて見ても手形の日はせまり

狡猾な笑いは獅子に似た入歯

大阪市 木村 十悟

咲いている道を二人はそれて行き
売春法奴少しもあわてない

一を書くように鰻は引き裂かれ
有名に禿げて帽子はもう買わず

書留が来たらし女房ケ・セラ・セラ
直木賞夢見た事もある机

大阪市 不二田 一三夫

講談本包んで土工旅へ発ち
レコードに合せてコーヒー混ぜており

ここいらで手を打とうかと見合をし
唇をつき出すだけで金になり

つまらない映画を出たら外は雨
大阪弁つかえば教養ない如く

貰われる犬亡命をするように

黙然と釣師は花を振り向かず
子を抱けば晩も蛙が鳴いており

パパ人が変った様に子を愛し
花見位いに妻嬉々として化粧する

個人展画伯は一人煙草喫い

兵庫県 酒井 ひか平

宇野市 津秋 六花

末席の意見喉仏までは出る
もう何年と云う退職金をはじいて見

子は新刊親は均一買うて去に
ダンスやる手で生花も習うて来

大阪府 金井 文秋

よく笑う女に油断したを悔い
末席の新米鋭いとこを突き

岡山県 戸田 喜楽

この月給で婚約時代の金使い
三人の無料を連れて母せわし

妻が膝突ついて睨む友が来る
未亡人と同情しては俺一人

娘だけ見れば長者の様ななり

唐津市 新岡 回天子

経上げる膝のあたりを蚤が噛み

女って損ねと子供出来てから

集金予定知らせ／＼と本社から

大阪出張

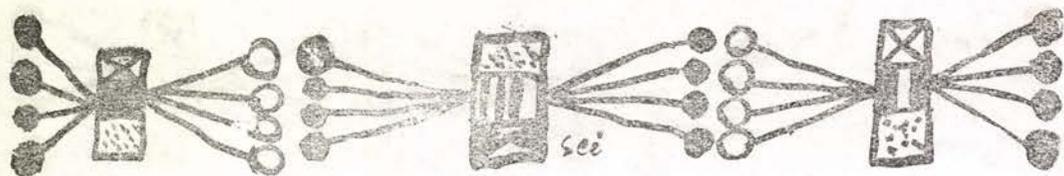
岡山県 池田 古心

東京都 石居 高志

岡山県 三村 柳風子

大阪出張

岡山県 三村 柳風子



鶴の如く瘦せておれども世帯主
自己宣伝が過ぎて女に持てもせず
見解の相違とりつく島もなし

大阪府 早川 清生

工場と煙突朝の水墨画
向き合つてあくびをするも夫婦なり
用度課に勤め私物を値切つて来
食いつめて故郷出ると戻ると
看護婦の心にも泌むクレゾール

大学へやれば演芸部で踊り

自転車ドロ警察証明くれたゞけ
スチームの部屋で宗谷へ指令電
女給だれも店の植木に水やらす
一枚の写真で嫁た日から仕え

デパートにおもちゃ動かす役でいる

菓子売場てんでに秤あてがわれ
仏教徒会議飛行機乗つてくる

メーデーで腕組んだのが妻になり
たらい買ひ替えたがうちの景気なり

女の流行千円で釣がくる

気の強い娘でペンフレンドへ嫁ぎ

退職で始めて社長から言葉

新課長僕はインクを入れ替える
背広着た日も商人のお辞儀する

大阪府 武部 若菜

太陽族一帖借りた恋

天罰のあたるを世間じつと待ち

小松市 伊藤 茶仏

手の届くところで人妻はしたなし
早起きを矢張り老齢だと皮肉られ
柔げ位い気になさるなど見下げとり

堺市 辻 圭水

出張はえらいさん仕事は廻つて来
春の訪れとともに汚職の記事がのり
謹告で明日から運賃あげます
重役の方がボスには弱いなり
分け前の少なかつた方が自殺して

善通寺市 松岡 委 滄浪

手形割る事だけと云う専務理事

石川県 中松 恒雄

白山の雪が見えてる花の宴
郵便屋に恋人出来たのを知られ
校長が変り将棋が碁に變り
アベックを職務訪問する野暮さ

滋賀県 中島 可十

空腹の眼にビルディング倒れそう
見えそうな目玉で鼠息が絶え
心中をするとは知らず貸ボート
道狭く牛がいるのを車掌詫び

大阪府 児島 亨 昌志

アルサロの一年生にもある色気
無意識に手首へはめたゴムバンド

岡山県 野々 口 美舟

恋しさが憎さに変る春炬燵
誘い出すチャンスもなくて花の散る

神戸市 小浜 牧人

県人会の世話する程に成り上り
子会社へ重役の名で落ちて行き
衣替え春の舗道へ活き返えり
喰べ終えて掌合わす子に育ち
長兄の亡父に似つゝ土に老い

メガホンも大鼓も甲子園で降り
一人旅岬の風に吹かれて来

春霞屋島は寝ているように浮き
揚雲雀お遍路さんも背伸びする

天理市 菱 田 満秋

女忠部屋からは看護婦さつと去に
両親も見て無理のない鼻と知る

値切ろうと大阪弁にきりかえる
敷いていて男女同権叫ぶなり

また来いと云う病院の二日分

兵庫県 前川 左文字

満開になつて花見をやり直し
貸ボート今は子供のために漕ぐ

岡山県 池上 知恵美

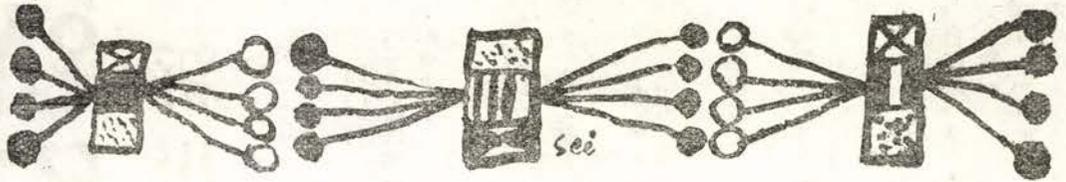
富士の絵を掛けて日本間木の香り
みんな嫁く母を残してみんなゆく

大阪府 橋高 薫 風子

小説の恋より知らぬ娘に育て
金力の限界を妓に教えられ

重症へ冬の毒が届けられ
淋しきは義肢に靴下履かせて出

合格の朝お隣の前も掃き
肺病が癒つた時に寿命が来



山口県 多田 ほなみ
芝居小屋たゞめばもとの冬の町
ストープも消えたまんまのよい天気
失業へ女であればなと思ひ

奈良市 宮口 笛生
植えといて良かったなあと春の鉢
日曜大工とうく未完成のまゝ
夕桜テンエイジャーにある邪心

大阪市 池戸 桃村
連休へ二つ休がほしうなり
お酒とわたしどちらがすきかと問われ

倉敷市 藤井 五茶
たゞき売り彼岸の寺を派手にする
たかゞバラ位いと云うて怒鳴られた
似顔屋のすゝけた衿をみつめてた
もう誰もお世辞云わない左前

岡山県 岡野 風の子
晩酌の好きな夫の量が減り
大阪市 西川 星

いんぎんに挨拶したら保険屋が
膝に猫ぶらさげた儘客迎え
春なれやあのケチンボがチップ出し
末の子を孫さんかとは失敬な
捨てられる迄うかうかとして暮し
ボスの子を頤で動かすうちの餓鬼
軒下三尺借りうけて酔いだおれ
花の下でポケットの札勘定し
無茶な奴同志が道理あらそえり

法の網くさり鼻くそ程儲け
アドルムの代りの書物積んで寝る
本屋十年本包むのの下手な事

同
舟
近
詠

松山市 前田 伍健
癒ったらでいゝと臥床へ揮毫もの
袖カパー恩給二た口もう近し
万一を話し老妻あわてさせ
あと味のまづさ実力行使すみ

大阪市 麻生 霞乃
爪剪つて朝の感情整理する
メーデーにクエンのない輪をつくり
ドライウエット綾織にして暮す気の

長野県 高峰 柳児
通信簿取柄は皆勤だけであり
猪口ためて役得本性さらけ出し
都会にも街路樹育つ土があり
二号などになれと育てた娘ではなし
雪の上飛んだ経験持たぬ蠅
テレビあるなど税吏メモを取り

大阪市 石田 沐天
彼れも又枯木の山の一人なり
テールプファイヤー此れも即ち事務のうち
結局はそろばんすくの信者なり
訪えば詩人いままさず開け放し

今治市 長野 文庫
綴方いつも喧嘩をしてるよう
利に追われ勝ちへ月日の流れ急
のし上る女権いくさに負けてから
チップなど当にしてない紙コップ

大洲市 米沢 暁明
奇術師もちよいとひや／＼して見せて
忘られたようにサロンで待たされる
残額は次に払うと言ったときり
均一の店で買ったと正直な

今治市 月原 宵明
後添えの金で買われた美しさ
そのかみの秀才と云う子沢山
北川丸沈没
はしやいで出た旅遺体で帰るなり

熊本市 大島 壽明
米櫃の底ぎり／＼の音を立て
消防が来て人垣の輪を抜け

新児童ウアイオリン・サークル

講師 麻生 アート
生駒 教室
TEL 306バン

西宮市仁川町五丁目七番地
くるみ幼稚園
TEL 638バン甲

★教室新設については新児童ウアイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい

い。味読すると神社に対して世間並みに親しみは持っているが、清い信仰からの参詣でないことが、「住吉さん」という語と「一ヶ所だけへあげておき」という表現から類推することが出来るのである。関西人は「住吉さん」「戎っさん」と神社に対して極く心やすい言葉で云い表わすが必ずしも深い信仰がある訳ではない。沢山な末社があつても、たいていは失敬しておくのである。この句、庶民心理を忌憚なく解剖しているのが面白い。

〔四二二〕

入学へここは便所と教えと

き (摩天郎)

小学校の入学であろう。うちの子は今まで外の風にはあてていないし、いたって内気な子だとその親々は思っているのである。入学式がすむと学校の中を連れて歩いて、「ソラ、ここが便所だよ」と便所まで教えてやるのも親ごころである。

〔四二三〕

口ひげの生えて来そうな女史であり (阿茶)

女史と呼ばれるほどの人に美人は稀れである。何何婦人会長として常に演壇に立って売春法案がどうだとか、戸籍法の第何条は婦権に圧力を加えるものであるからすみやかに廃止しなければならぬとか年中頼の筋肉をこわばらしているのを見ると、今に口ひげが生えて来そうに思われると云うのである。皮肉な句である。作者が女性であるのも面白い。

〔四二四〕

年四十タイプ何時迄打つ

もり (季 贊)

会社の隅で、終日パチパチパチパチ、ガチャン、チーンとやっているオールドミスのタイプストを詠んだ句である。別に独身主義者ではないが収入がいのと良縁に恵ぐまれないので、いつのまにやら芳紀正に四十になったのであろう。年が年だから初婚はのぞめないし、後妻になって気苦労するよりも、いつそ今のままが気楽だと半ば結婚をあきらめているようである。それを「いつまで打つつもりに」と常に異性の社員の話題にされているのである。

くずして悦に入っている様な人々に對し、いつも困った「連中」といさゝかの憤まんをこめて微笑をくり返しているのである。

「俳風末摘花」は、時代の無理解なため、一旦裸にしてはうり出された文芸であり、その点を指摘して尾籠無漸であるとして排斥されていた。これを本来の姿に立ち返らせらるるには、まず腰巻で被い、着物を着せ、更に化粧を施して一句一句高尚な文芸に仕立て、民衆の前に持出さねばならぬ。(中略) いわば古典文学のパラック建築である。復活途上にある古典「俳風末摘花」は、これを再び裸にするような粗末な扱い方をすれば、ワムイセツ文書に墮する危険は十分あり、これを防止するには出版人の良心にまつ他はない。(中略) 被告人は、古典を毒に用いたといふべきであつて、右「末摘花」は川柳人よ、消えて亡くなれ。

「俳風末摘花」の出版公開については、出版者の態度または該出版書の取扱い如何によつて毒にも薬にもなる。この書は俳諧のヴェールを掛け、鑑賞せらるべきものであり、煙滅に瀕していた古典で

あり、失われた大事な部分はいずれも前句で、附句の中にもまた歪曲変形されたものが少くない。これを回復することは容易でない。

「俳風末摘花」は、時代の無理解なため、一旦裸にしてはうり出された文芸であり、その点を指摘して尾籠無漸であるとして排斥されていた。これを本来の姿に立ち返らせらるるには、まず腰巻で被い、着物を着せ、更に化粧を施して一句一句高尚な文芸に仕立て、民衆の前に持出さねばならぬ。(中略) いわば古典文学のパラック建築である。復活途上にある古典「俳風末摘花」は、これを再び裸にするような粗末な扱い方をすれば、ワムイセツ文書に墮する危険は十分あり、これを防止するには出版人の良心にまつ他はない。(中略) 被告人は、古典を毒に用いたといふべきであつて、右「末摘花」は川柳人よ、消えて亡くなれ。

要するに、末摘花流のこのエロ川柳出版物は、ものゝ見事に法の適用をうけ、有罪との判決をうけたわけである。ワイセツ出版物といへば、われわれ直ちにチャタレ事件を思い起す、しかしこれらエロ川柳と同断にすべき筋合はいさゝかもない。くだらぬエロ句とチャタレーをいっしょくたにしたのでは、ローレンスにも言い分があるところか一笑に付してしまふにちがいない。雑誌ジャーナリズムの横道にも欲しげにたゝずむ困った川柳屋に、とかくこれは訴えたい事実であり、その判決文だと申していゝだろ。

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀
葎乃 福壽草 句集

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

発行所 川柳雜誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

定価二百五十円

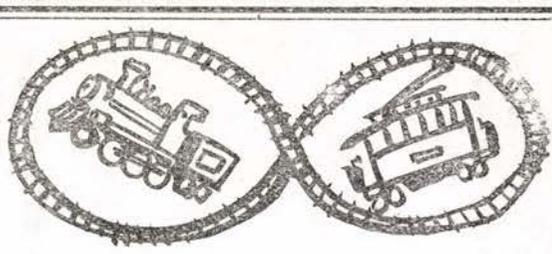
送費 三十円

菊半型・函入

郵政口販大阪七五〇五〇番 電話住吉(7)六〇八一

水客を語る

川柳超特急



— 達人る語 —

麻 生 路 郎
 麻 生 路 郎
 生 生 路 郎
 川 尾 川 生 路 郎
 杜 潮 紫 菫 路 郎
 的 花 香 乃 郎

司会——氏の雅号のせいでもない

のでしようが、月初めにこの座談会をする段取りをしたら、紫香氏が旅行中でダメ、それから二、三日したら潮花氏がカゼ引き、それがすんだらこんどは紫香氏のお子さんがハッカと、ことごとく水に流れたワケで、云うなれば各停で旅をするようなもどかしさでしたが、どうやらさきよりは皆さんお揃いで、やっと軌道にのつたというところです。では例によつて、レイ・ファウスト、霞乃先生から発車していただきますよ。

霞乃——大阪鉄道局に勤めておられてお忙しい人ですから、句会の日以外はあまり話あうことがないのですが、キチンと座っている時の水客さんは、矢がつつたつて

いるような感じですね。
 潮花——うちの女房の云うことによつて、鶴が立っているようにだつたことと、鶴とありますが、細い矢と鶴とは、うまく表現したものですね。(笑)

紫香——かたちを崩さず、あのかしこま、たま、で、アツと言つようなシャレや冗談をトバスのですよ。

杜的——そうですね、会社でもその通りです。たくまざるユーモアとでも云いますか、私なんかもととき水客さんの上手いシャレに感心させられております。

紫——こどもの頃から、かたちを崩さず冗談を真面目な顔で言つてのけたり、ちよつとした手品をしてみせたりして、僕らをよく笑

わせてくれたものです。

司会——紫香さんと水客さんとは親類だそうですね。
 紫——イトコ同士なんですよ、母方のね。つまり僕の母の妹が彼の母というわけです。幼稚園はずつと一しょでした。天下茶屋の小学校一年生の時、家庭の事情で、彼は東京へ行つて、早稲田中学から早大へと進んだのですが、ご父君が亡くなられたので中退して、それからまた大阪へ帰つてきて関西大学の夜間部を出たのです。彼が東京にいる頃こちらで潮花君らとカトンボという同人雑誌を発刊したのですが水客君は「秋羊」というペネでよく寄稿してくれましたので、この三人の友情は、西と東に別れてもきれることなく、

今日までつながられてきたわけですね。
 司会——川柳はどなたが先輩なんですか。

紫——水客君が、大鉄の〃祥柳社〃で故福田山雨楼氏に指導されていたので、君もやれよとすすめられたのが、そもその病みつきなんです。(笑)

潮——僕は紫香君から、君もやれよとすすめられた。(笑)

杜——旅行は好きですね。

紫——その頃から鈍足会という趣味の旅行のメンバーでした。
 潮——僕は早や足や、たせ、君やろ鈍足は？(笑)

紫——水客君は相撲も好きですね、いまは若ノ花に熱を上げています。芝居も好きです、ことに歌舞伎は亡母の在世中代るたびに連れてゆくという親孝行ぶりでした。

ね。芝居の話が出たので、また福井座が登場しますが、福井座の経営は私の父がやっています、資金のほうは水客君のお祖先さん(正石紙問屋)が出していたのです。そうですね明治三十七八年というから、日露戦争のころですね。明治天皇と日露戦争というところかな。(笑)

霞——福井座なら私も知っていますよ。

路郎——福井座は福井茂兵衛が立籠っていた小屋だった。曾根崎新地を東西に流れていた蜷川に南北にかかっていた桜橋のすぐ西で北側だったと覚えている。蜷川が埋め立てられて今では桜橋と云つても橋はないし地名として残つて

いるにすぎない。私が大阪へ来たのは明治三十一年だから随分昔の話だ。

紫——私の父が経営していた頃の座付の役者に嵐瑠徳や佳笑がいました。後の曾我廻家五郎が中村三之助といい、十郎が時代といつてウマの足をやつてた頃ですから古い話です。それから水客君は、新国劇の辰巳の国定忠治の声色が上手です。

司会——瑠徳って、帝キネにいたあの人ですか？ 百々之助の十七八のころですね。

紫——その瑠徳の養女というのが、私の姉なんです。

杜——同じ大鉄にいる関係で私は水客さんに川柳を手引していただきましたが、さすがに川柳のひき出しみたような人だといわれるだけに、あの人早い作句ぶりにはいつも感心させられます。句会

こりと痛みに
サロンパス
 久光兄弟株式会社
 東京・佐賀・大阪

案内の葉書にそれはそれは小さい文字で、キチンとあの人独得の右下りの字で句を書きとめて、これまたキチンと二つに折って、服のポケットにしまっておられます。

潮——キツチリ屋といえは、水客君は、時間のことなんか正確やな。

司会——因鉄時間は世界的ですからね。(笑)

潮——食事はおそいな、川柳は早いけど。(笑)

杜——よく噛んで食べるからでしよう、甘いものが好きなんですから、歯がわるいのでしょう。それからあの人の電話は長いです、というのは、さつきも話が出ました、何んでもキツチリするからでしようね。つまり本職の統計がそうさせるのでしよう。こと統計にかけては大鉄きつてのペテランです。

司会——そうキツチリやられると、奥様のへそくりがやり難いでしようね。

紫——そこは愛妻家ですからうまくヤラレていますよ。(笑)

潮——怒りよるぜ。

紫——やめとこか。

司会——そんな思わせぶりな言いかたをせずせ聞かせてほしいですな。

紫——別にそういう大事件でもないのですが、三人が笑面にいた頃、行きつけのタバコ店にそれはそれはカレンハ娘さんがいましてね、その娘さんを「椿の君」とよ

んで、水客君が淡い思慕の情をよせていたのです。

司会——水客さんはタバコをよく吸ったでしょう、その頃は。

紫——ところが水客君はタバコをよう吸わんで、吸うのは僕で買いにゆくのは水客君だったので。(笑)

潮——結局タバコを買いに行くと、たつた



影 近の氏客水本正

立つつや。

潮——水客君は得やな。

紫——旅をしても女には無関心らしい。一人で静かに句帖へ川柳を埋めてゆくという、文字どおりの作家型だね。

潮——感傷的句を作っても人は少しも感傷的になつていないようだ。

紫——同じ旅の駅を詠んでも、

それつきりの話でこの純情物語は終い。(笑)

紫——そんなことなら誰もが一度は味わったことでしょう。

潮——しかし、水客君には女の

話はこれだけよりないのです。

潮——そのくせ、彼の句には女という文字がフンダンに出てくるが、人は少しも気がつかない。僕がちよつと女という字を使うと、また女が出てくるといわれるがエライ損や。(笑)

紫——君のは、色っぽいから目

杜——やめても十五年間は無賃バスがものをいいますから、水客さんの川柳行脚はまだ二十二年位は大丈夫続きますよ。

司会——話題をチョットもどしていたゞいて、ご家庭は子供さんが何人ですか。

紫——男女五人という、ちょうどいいところです。上が二十才ですが、君の奥様の妹さんというのは、やはり川柳人の辻白溪子氏の奥様なんです。

路——そうかな、そりやあ初耳だ。

司会——どうやらスペースもなくなってきましたので、皆さんから水客さんの句を出していたゞきましよう。

潮——川村好郎氏が、水客ファンで、水客君の句は全部まとめてあるそう。句集でも出すときは好郎氏のもとへゆけば、たちどころに句集が編めるというわけで、まづたく美しい話だと思います。

路——兎に角、水客君の句は旅の句に於いて特にすぐれている。これは仕事の関係上、よく出張するので、自然に親しむ機会が多いからであろう。そして非常に静かに自然に触れていることも特徴だと云えよう。水客、紫香、潮花と云えば幼雅園時代からのおさな友達で、二十幾年間、一緒に川柳をやつて来て川柳の三羽鳥と云わ

れているが、斯うしたことは川柳界にも稀れに見る珍らしい存在だと云えよう。

ひっそりと蛭生きてる
音をたて

ひっそりと蛭生きてる
音をたて

竹の皮冬の音して踏まれたり
松茸が届いて何も言うて来ず
いちにち中時計が鳴ったのを知らず
月横に動く見れば汽車曲る
お休みなさいと云うて
女中の顔になり
足袋少しきつく女は旅に出る
阿蘇山にて
草千里霧は重たき色となり

司会——どうやら後膳駅にきたようです。お疲れのところいろいろ好資料を提出していただきましてありがとうございます。(司会・筆記・一三夫)

お茶の御用は
白龍露
波の
許雲松
茶露茶
抹玉煎
お茶の宇治園
心齋橋大丸百貨店前 TEL(27)3489



下宿代安うて薪も割らされる
鉢巻をすれば給金が上る同 貝塚市
ロケ隊が来るで学校早退す
風吹けば風に逆らう反抗期
注射にもあきたか母の養命酒
せんべいに大仏さんがちよこまり同 大坂市
病床へ花も意志あり咲いてくれ
ドサ廻り白粉のまゝ銭湯に来る
枯つたに春がはいよる赤い屋根
花見にも行かない姉で琴が好き同 熊本縣
退院が近しくイブに熱をあげ
善行も明るみに出て卒業日
母さんに嘘言つて来て待ち呆け
里帰り用意おさおさ忘れもの同 奈良市
道具屋の三味町内と行く花見
KKにして呉服屋も服で出る
恋人を乗せドライブに自信なし
絵にかいた平和桜の下のひと同 茨城県
散る花にすがる思いの更年期
まりの哀れやハンチングが似合い
甥川大卒業就職す

愛犬病死

犬の毛が交る懐し袂屑同 大坂市
愛犬を男泣きして埋める宵
好きだったボール一緒に埋めて
婚札がすんで日柄にうとうなり同 山口縣
折詰ですます花見が三次会
通る管金が押してる横車
早よ去んで泣きたい涙ぶら下り同 岸和田市
鳥籠へも何か云いたい暇乞い
頼母子を落して春を追いかける
過去なんてないわと妓つぎこほし同 鳥取市

- 同 阪本阿季良
- 同 米虫一乃字
- 同 淵川 秀敏
- 同 吉田 凡茶
- 同 齊木 康生
- 同 永田都詩子
- 同 安平次弘道
- 同 内藤きさ子
- 同 北村 三歩

薬局の診断高い方にしてくれる
たしなみの紅白粉に手間がいり
仲人に云わすと二人なら食える同 金沢市
栄転も左遷も合同送別会
ドブ臭いしごとで天地にせず住み
重炭酸ソーダか僕の処方箋同 大坂府西宮市
〇、〇一夜間でも白衣着る
背番号六つ風呂屋で見るとやいと
枕頭へ遺産の欲ではべりけり同 西宮市
原子展戻つて鶏の菜をきざみ
さくら咲く国だよ同 鳥取県きいた寿し
三代の養子でどうやら鯉のぼり
甘ちゃんて育ち嫁いで尻に敷き
アドバルンのような男で頼りなし
握手する金の指輪がもの申し同 玉野市
役得の酒で倒れたとも云えず
乳呑児を抱え光陰矢の如し
借り衣裳さきんまではよう酔わず同 大坂市
鳩時計のように車掌は云うて消え
仲人へ七難かくすお茶を立て
看板屋英語解らぬまゝで良し同 宇都宮市
貸本がいと停年すゝめられ
石橋をたゞけば運は逃げている
四、四半期予算消化の旅靴同 岡山県
御先祖を移転の荷物へ包みこみ
花売りに父の命日おしえられ
虚礼廃止すれば冷たい人にされ同 天理市
プレゼントしてから兄の分を編み
まだ生れないのに兄ちゃん同 豊中市
豆板の様なお顔で女好き
遺産とはありがたいもの恋へ注ぎ
葉桜の青が眼にしむのも恋か
膝枕してゝも家を口にす同 大坂市

- 同 能村美佐緒
- 同 岩垣日本村
- 同 岡崎 一也
- 同 杉本 一鶴
- 同 則田水鏡子
- 同 本多 省三
- 同 平田 実男
- 同 江国 幽谷
- 同 仲野花鶴美
- 同 石川ひさみ
- 同 板東千代美

これなどは無言の指導であつて、句はその真髓をよるといふのが、先生の行き方と思われる。
日本人の性根

先生の有名な句に
古くとも僕には仁義禮智信

という句がある。この仁義禮智信とは、古い支那の教えであるが、日本では口には言わんでもみなこれ基いて、近年まで服膺していた。宝嶋集の、駿鸞雜話という本を見ると、この仁、義、礼、智、信が至極判かりやすい偶話の形で説かれてある。嶋集は徳川幕府の大儒であつたが、詩文も良くし、国文和歌にも通じ、徳川時代一流の文章家と称せられた。赤穂浪士の復讐に對し当時世論ごう々たる中にあつて義士の名を以て呼び衆を制したことで有名である。日本人が、この朱子の教えではあるが、至當の道忘れてしまつては問題外である。

例えば事業家のような立場の人でも、漢籍の素養のある人は、経済記事のうけとり方もちがひ、おむね遠識である。先生の句が、いつも柳人の精神の振作に役立っていることは、この句によつても分かるのである。

私は日本人の性根というものは、欧米人とはちがひ、何かこう技(わざ)がきいてる感じがすると思う。これは、国土の感化もあるうし、また乏しい資源の中に在つて、子供のうちから、遊びご



青春の敏へわが田の小さすぎ 滋野市
 書見器と別にかくして読む雑誌 大阪府
 百花爛漫妻はやつぱり食べること 山口県
 一茶の句唱えて昼の蠅を打ち 山口県
 退院へ寝まきの袖を振る別れ 山口県
 待っていましたお花見の誘いが来 山口県
 口だけは至極達者な病み上り 布美市
 二階借無駄足踏まぬ鍋もさげ 岡山県
 安物でよいと春着をねだって見 岡山県
 貸した傘帰らぬまゝに今日も雨 天理市
 ニューロック着たも特売見に来 天理市
 内職へ校の話もって来る 天理市
 たんねんに 笠岡市
 用たしに出せば映画を見て帰り 笠岡市
 前身はダンサーなるほどな思 岡山県
 喧嘩ばかりしていただきますの 笠岡市
 友情の便りに鮎が待ってるぞ 笠岡市
 水遊び跳足になると仲間にし 笠岡市
 恋消えてシャツの汚れが気にな 笠岡市
 失意の日マダムの流し目に出 笠岡市
 新しい角帽親父もかむって見 大阪府
 野心はないと云う白髪を染め乍 大阪府
 袖カパー卓球世界一の腕 今治市
 一本のマツチが燃えただけの恋 今治市
 始末したのを風邪にした共隊 大阪府
 洋装の腰に見付けた春の線 大阪府
 どなってる母が昔の小町とは 日南市
 嫁の愚痴云って娘のぐち云わ 日南市
 診断書 近頃 労働倦たい期 府中市
 パチンコに負けてやけ酒飲 福岡県
 彼岸寺尼僧の法話見て帰 福岡県
 建て増しの乾かぬ部屋で酔う景 金沢市
 股火鉢談義きかされる 金沢市

正宗 柳絮
 同 坂東 若芽
 同 前野 美保
 同 久米奈良子
 同 杉本たつよ
 同 岡田花奈女
 同 出原 真奇
 同 光好 陽子
 同 藤宮 淀月
 同 越智 義夫
 同 草深 翠唱
 同 池内 好日
 同 谷沢 好祐
 同 田中 千鶴
 同 小林てるじ
 同 阿部たけし
 同 板緑 一星

スボーツで食う気の若さ叱られる
 無欲だと株の動きもよく分かり 石川県
 持株はたまに動けば儲が下り 石川県
 母ちゃんを試験して子は得意がり 武野市
 踏みつけて踏 武野市
 幸福という乳母車妻が押し 西宮市
 戦後派の寄附で謡曲堂は建ち 西宮市
 道楽がやめば中気で寝てしま 大阪府
 隆鼻術しても末つ子売れ残り 大阪府
 茶道など知らず新茶の香り褒め 大阪府
 乾盃をするのについで特級酒 大阪府
 母さんの面目ほどこす子の行儀 黒木市
 母ものへ不覚に俺が涙する 黒木市
 お世辞真に受けて後家 高槻市
 シルエツト見まがう程に恋に瘦 高槻市
 勉強をする気で迎えた新学 大阪府
 むぎ / と損する人でないと知り 大阪府
 嫁く話貰う話の春や春 松江市
 春や春 観光パスの砂煙り 松江市
 押し売りが目の正月をせよとい 大朝市
 新築へ最初に間取りほめてお 大朝市
 甲斐性が隣のテレビで疑われ 名古屋府
 夕焼が庶民の家を紅く染め 名古屋府
 間借りでも寝て、桜が見えま 石川県
 一万円当った積りが派手に呑 石川県
 春の陽へ蟹で機嫌の泡を吹き 香取市
 御先祖の法事は東にしてまつ 香取市
 死ぬ気なら食えと附添サジを 水見市
 ならぬ恋添わせて叔母に過去 水見市
 悴せは妻が晩酌ついでくれ 高知市
 身の廻り一切妻の好みです 高知市
 妻君もマイクに立て、町議 岡山県
 人ごみを恐れて桜見ずに済 岡山県

同 高瀬 孝次
 同 星川 陽石
 同 樋口 舟遊
 同 安並 十七
 同 米浪進之助
 同 星野 草柳
 同 高木 十兵衛
 同 河井 庸佑
 同 岡崎 祥月
 同 富永 建朗
 同 野田 一念
 同 齊藤 巖
 同 越智 一水
 同 関 美子
 同 川竹 松風
 同 福田 祥男

真上から来られると、時たま鉄輪
 を外ずされるから、よく濟(どぶ)
 へ漬けておいたものだ。一と晩ど
 ぶへ漬けておくと木地が締って独
 楽が生き返る。あす〇〇を捕
 てやるうと思つと、夜抱いて寝た
 りする。
 竹馬は、屋根へ上がれるのも、
 子供心に競争でつくつた。どんな
 風にして行つたか、よく竹馬のま
 ゝで、酒買いにやらされたものだ
 った。
この頃の新聞
 この頃の新聞の論調などは、甚
 だ日本的でない。ジャーナリス
 の見解だけで、そこに日本という
 自分を生んだ国を守ろうとする熱
 意が、見られない。大きな問題を
 とり上げて、外に向つて、しきり
 にものを云うが、論旨はいつも上
 すべりがしているようだ。朝日の
 天声人語といえは小生の青年時代
 からずと見ているが、この頃は
 小姑みたいなことを云う。しかし
 これで編集手帳や視滴よりは、大
 分ましな方だから、矢張り朝日か
 などは思えるが。由平大学教授と
 いうものは迂遠な人の見本の様
 なものだけに、新聞が矢鱈にこれ
 を持上げる。この人たちは、人
 間が火星へ行けるようになってか
 ら、もの云つてもらつてもおそく
 はない。国民は、大学教授の云う
 ことには、精々目をつぶるべきだ
 と、思つてる。この頃の新聞で見
 所と云えば、いま読売連載の棋戦
 で、塚田升田が指してる将棋ぐら



乗りかけた船が出て行くあつけな。乗務員市
いつまでも子供ですよと母うれし 掛田田市
減税へ同志会費を値上げされ 同
月給のせいにしておく借りが出来 同
こけそうな家から出て行くイッパ 笠岡市
カナリヤの籠へも税吏の目が光り 同
血圧がどうのこうのと耳掃除 大塚市
ことごとく一人祝盃またたのし 同
実力の世界王座の短かすぎ 大塚市
岡惚れが出来て遅刻をしなくなり 同
その中になんとかなるし甲斐性 大塚市
父小唄母は三橋で子はマンボ 同
土地整理から裏通りへ門が向き 高西市
イヤリングつけて和服も自信持ち 同
縁日へお多福風の子も連れて 東京市
処世術の一つさとはらを吹き 同
人生の黄昏お茶の味おぼえ 倉吉市
日直が派手なくびの春日和 同
不器量な姿本場というわさび 河内長野市
結局はダムへ身売りをした部落 同
町のダムこれも九千万のうち 福岡県
合格の活字よく似た人があり 同
栄転の家族窓中笑顔なり 博山県
父さんが寝ていて外でよく遊び 同
人生の終点近し顔の皺 奈良県
花は咲き月はおぼろだ若さ欲し 大塚市
勤務替えあるとてナース落着かず 同
通天閣に立てば浪速は春霞み 同
笥を頼んでおいて墓参り 芦屋市
我がものとサイクリングは横列で 同
五十過ぎ燃える希望を注意され 京都府
写真顔うつかり褒めてにくまれる 西宮市
惚れて居るくせに邪慳なM過剰 出雲市
水取りの僧の足音聞くテレビ 西宮市
婦人科の待合フアッシュン 西宮市
十八がなかったように親爺云い 西宮市
歎楽の儂なき朝のネオン管 宮津市

干鰯谷和子
同 植山 武助
同 木山桃仙坊
同 青柳扇子仙
同 竹内 千里
同 六車 静々
同 辻 白溪子
同 菊地 紀久
同 奥谷 弘朗
同 大杉 春吉
同 三上 春雄
同 二宗 吟平
同 木村よしを
同 半田 夏生
同 里田一十
同 真野 康彦
村上 球絵
加藤 虹路
松島 光一
酒井 丹謡
橋 十四呂
宮下砂風呂

信仰を得ましたと云うバツジつけ 尼崎市
分解しそうにボロボロ曲るなり 石川島
アメリカ衣料隣りもピラが効き 賀山市
テレビ塔出来てお城が低く見え 大塚市
ほろ酔の今日は妥協をせぬつもり 大塚市
更年期足の裏より冷えおぼえ 大塚市
麦の色日に日にせまる忙しさ 愛媛県
只今が大きく百点とって来る 京都府
狭き門くざれば寄附が待つて居り 高知市
耳かきのかんざし老婦手放さず 八代市
聞耳を立て病人は客を待ち 笠岡市
神経痛は人並と云う齢となり 笠岡市
病人も卒業式が欲しい春 庄内市
失意ふと爪のびてのを見つつけ 笠岡市
しとやかに習う作法も茶の間だけ 笠岡市
性格が違うで丁度よい夫婦 笠岡市
虚栄などなくて野花は咲き競い 赤子市
へつらわぬ事を誇りとして貧し 石川島
人魂のように門燈灯いており 宮崎市
ほめた気が以外あぬ娘の気をそ 長理市
病歴を忘れ仕事を撰り好み 長理市
末っ子が長男ですよと若返り 宇部市
ドタン場に来て若かった事悟り 大塚市
バスのゆれ程に心も揃いたい 石川島
色気ない欠伸夫婦の間柄 守部市
三分咲もう待ち切れず酒を提げ 赤子市
艱難はいつか至んだ玉になり 大塚市
百田が惜しいじゃないと云う意見 鳥取県
棟梁を見下ろして指図受け 兵庫県
行楽へ主婦無邪気なる勢揃い 富山県
ユニホーム姿で親の腰かじる 山形県
本当のように憶測云いふらし 岡山県
復職へ時計のねじを巻き直し 大塚市
祝われる話へ鯛も反りを見せ 小松市
ドライとは思えぬ両手ついで去に 河内長野市
氷割る妻の手震う入院日 岡山県
落花さかん法界屋の声かすれ 同

井沢 正直
岡島 新一
大林あつき
尾花 群雀
林 昌男
遠山よし子
河本南牛子
塚脇 笑太
須藤 俊江
永松 道雄
佐内 隆文
木山 遠二
木田 稔
木山 二路
酒井 一雲
谷本鈍愚坊
神庭 詩郎
村井 城南
野口卯之助
小嶋 静歩
小田 柳叟
神田 豊年
寺楠 花車
中町 三平
鎮浪 錦花
景山 蘇生
広瀬 我利
鈴木村諷子
前川 越山
川端 文一
菊地 白葩
杉田 明美
小竹 史子
万仲 一進
森本黒天子
井上 旭峯
無名氏

いのものだろう。なかななく、四局
目の七譜(四、二三)あたりは神
品というものを思い知らされた。

● 青 べ ん

一 三 夫

四月二十六日、路郎先生は早く
から、エレンブルグの歓迎パーティ
へ出て行かれた。文芸大講演会
会場の中央公会堂へ、葎乃先生の
お伴をして、ぼくも聴衆の一人と
なったが、その文芸講演より、お
びたしい聴衆の教にまず目をま
わしたものである。階上階下ギッ
シリ話した盛況を、川柳の会と結
ぶ時、「川柳未だし」と思った。
路郎先生は親親パーティでエレ
ンブルグ氏とテーブルを真向いに
されたそうであるが、いずれ本誌
に興味深い記事となって紹介され
るのである。

核実験の講演も政治家としてで
なく、作家としての氏に聴入った
が、漁業問題等には全然ふれてい
なかった。講演が終って聴衆の中
を練って引きあげさせたり、階上
の大学生がスクラムを組んでこれ
を送る風景などいかにもッ連的
だと思った。

川柳で「あれくらい集めてみた
いね」と言われる先生。そんな日
が早く来てほしいものである。

川柳雑誌社特製
投句用 柳 箋

一冊(五十枚綴)三〇円
送料(一冊を)八円

川柳家の二十四時

猪大家の真夜中の夢から、晩酌の獅子の歌や食卓の酒の中まで覗かせて頂いた。猪先生の生活断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。——編集局

(13)

下関市

藤井米三

- ★一時——睡眠中
- ★二時——同右
- ★三時——同右
- ★四時——同右
- ★五時——同右
- ★六時——同右
- ★七時——起床
- ★八時——茶客時間
- ★九時——同右
- ★十時——揮毫即ち筆の時間
- ★十一時——同右
- ★十二時——風食
- ★十三時——休養
- ★十四時——風寝
- ★十五時——同右
- ★十六時——運動時間
- ★十七時——同右
- ★十八時——ラジオ、新聞
- ★十九時——茶客
- ★二十時——雑談

- ★二十一時——同右
- ★二十二時——入浴



で御申越しに對し別にこれと云う記事もなく申訳ありません。幸い左をやられたのですから、揮毫が出来るので、毎日一時間余書いて

- ★二十三時——就寝、睡眠
 - ★二十四時——睡眠
- 不肖儀昭和二十八年十二月七日
突然軽い中風に襲われ、以て約五
カ年間療養生活を続け、日々閑散
睡眠をみじかくして、風寝で補う

でおります。
★酒は養命酒を食前猪口で二、三杯。

★煙草は一日新生を五本位。
★来客は殆んど市内同人。
★函みがきは資生堂のパール函みがき。

★家内とは昭和二十一年に死亡後
独身生活。子供等の仕送りで家賃
と合わせて約一萬円の月収が有り
ますので、業代も要りませんが、一
人暮らしには充分です。

★読書は川柳雑誌の類を愛読して
います。私も年齢八十才の一年手
前で七十九才で、眼も右が白内障
で、左眼ですが、日常の用事

東京都 阿部佐保蘭

- ★一時——永年の癖がありますの
で電気あんまをお尻にのつけて
寝ることに去年の暮辺りからし
ています。この頃には大抵脱肛
も納まってうつら／＼と夢路を
辿り始めています。
 - ★二時——風の疲れも手伝って本
当に寝て了います。
 - ★三時——六時 牛乳屋の音にフ
ト眼覚めると硝子戸越しに夜が
- 白みかけているようです。
★七時——八時 七時半頃までう
つら／＼と床の中で妄想に耽っ
ています。近來本業に追われて
柳界へは御無沙汰勝ですが、余
裕が出来たら川柳と翻訳の研究
に余生を送りたいと念じていま
す。七時半ガバと布団をはねの
ける。潤製ライオン歯磨で歯を
磨き、ミツワ石鹸で顔を洗う。

本 格 の 品 質

アサヒビール

には差支えありません。



行った先が柳友の家だつたりして面喰つた事もある。

★十九時——二十時 七時帰宅嬉しい夕食のまどいに加わる。カッの時もあれば刺身の時もある米飯軽く三ぜん何んでもおいしく頂戴する。高校二年の長女中學二年の次男に妻の意見も出て食卓は賑やかなことである。

★二十一時——二十二時 註文の品に渋札をつけたり記帳したり発送の準備をしたりする。

★二十三時——入浴後患部にエフレチンをつけて床に入る。柳誌を讀んだり、週刊誌を見たり、修養書を繙いたり一日中で一番心優しい二時、みかんか林檎を寝床の中で喰べる。

★二十四時——今日は珍しく執筆してありますが、この処気儘に好きな本を讀み疲れた頃スタンドを消すことにしています。

★二十五時——歳のごでしよう。★六時——いつも時間には必ず眼が覚めます。

★七時——掃除が出来てないので一時間経つてから起きます。

★八時——朝食を摂りますが、最近酒を好みませんので、煙草を吸うことが多いものですから、味噌汁は欠かしません。

★九時——十時 大抵の日は散歩がでらに外出します。

★十一時——帰宅してから新聞や郵便に眼を通します。

★十二時——風呂、お菓は注文したことがなく、何んでも頂きます。

★十三時——十四時 函館の街へ出ぬ時は、町役場から通知に依つて、受持ちの町へ伝達する。

★十五時——帰ってから大きくもない花畑の草とりを行事として

★十六時——十七時 時には家内の手伝いをします。楽しみなものです。

★十八時——夕食、魚類等で終ります。

★十九時——句会の日以外は殆んど外出はしません。

★二十時——ラジオを聴いたり、夕刊に眼を通します。

★二十一時——田舎は夜になると静かです。

★二十二時——十時ともなるとそろそろ寝支度です。

★二十三時——二十四時 床に入ると、すぐ眠れます。疲れが少ないのか、夢を見ることが少いようです。

★九時——店の者に今日の用件を伝え、出張の準備にとりかかるこの間に電話がかかってユースが変更になることもある。週に一回九時から三時間位あんま鍼の治療をやつて貰う。

★十時——十一時 オートバイで商売に出かける。女相手の商売なのでよっぽど気の長い者でないといつとまらない。話題につき

★一時——よく眠れます。★二時——四時 五時までは小用に二回位起きます。

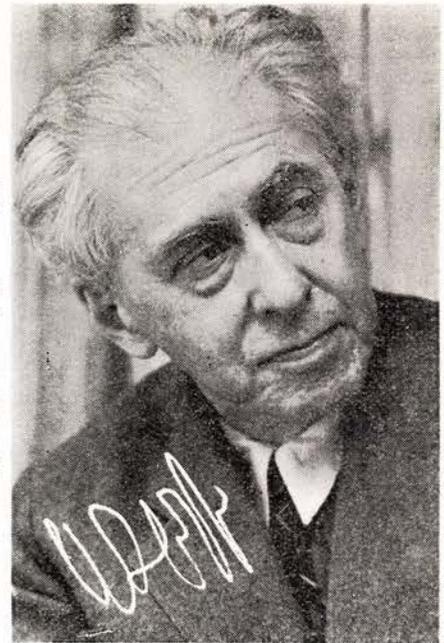
北海道 亀井花童子



退屈になると空気を差しあげる

★二時——四時 五時までは小用に二回位起きます。

★五時——歳のごでしよう。★六時——いつも時間には必ず眼が覚めます。



氏グレンブルグ・エ・キリイ

川柳ソ連へ

—— エレンブルグ氏来日を機に ——

麻生路郎

ソ連の作家、評論家として世界的に有名なイリヤ・エレンブルグ氏がリュボーフィ夫人を携え、日ソ文化交流のトップを切って四月七日午後五時十五分スカンジナビア航空機で東京羽田空港に着かれた。そして東京、新潟、福岡などの講演や視光を終え、四月二十六日の風前に来阪されることになった。私はエレンブルグ氏関西歓迎実行委員の一人だったので午前十一時に新大阪ホテルへ出かけ、同夫妻の到着を待った。予定が大変おくれ午後一時半頃に漸くエレンブルグ氏夫妻や東京からの随員など姿を見せられた。エレンブルグ氏は六十六才の白髪ではあったが、なか／＼元氣だった。ホテルの階上ですぐに記者会見がはじま

り、約三十分ぐらいクダグダ話をすすめられた。極く自由な態度で語られ、おべんちゃらを振りまかないところが気に入った。通訳はモスクワ大学のプロフェッサーのネムゼルさんがされた。一寸不審な点があると、ロシア文学者の米川正夫氏の方へ顔を向けて、「どうだね、これでいいかね」と云う風な態度をされ、なか／＼愛嬌があつて面白かった。この大学教授はソ連に於ける日本通の第一人者だとのことである。記者会見が終つてから私はエレンブルグ氏に、拙著の句集「旅人」と霞乃句集の「福寿草」及び川柳不朽洞会員の句集「私達」と拙著の「川柳とは何か」の四冊をデディケートした。そしてこれ等柳書をソ連で訳

して文化交流の一助とされたいことを希望したところが、ソ連には訳訳するところがあるし、自分もいいものを持って帰つて欲しいと頼まれているから、その方へ渡すことにすると心よく引受けてもらった。川柳の外語訳については『川柳雑誌』の菊版時代に「五七五の翻譯」で詳しく書いたように約三〇パーセント位しか訳せないだろうとは思ふが、たとえ全訳でなく訳せるものだけを抜萃してでもいいからあちらの新聞雑誌に掲載することと小冊子にしてでも出版し、ひろく読んでもらいたいと思ひエレンブルグ氏に贈つたのであった。

特にエレンブルグ氏を選んだ訳は、氏は日本の短詩文学に関心をもち、特に万葉の人麿の歌や啄木の短歌などに深い理解を持つてい

ることを知つたし、殊に啄木や漱石のものなどは既にソ連訳で出版されているとの話に、啄木の短歌に理解を持たれている以上、私達の川柳についても充分に理解されるに違いないと思考したからであつた。

午後三時から五時まで、産経会館の新大阪館でエレンブルグ氏夫妻歓迎の懇親パーティが開かれ、夫妻とプロフェッサーに花束を贈つた。ここで私はエレンブルグ氏と一ツテーブルで差向いになつた。こゝで集つた人たちからいろいろ質問に答えてもらうことになつたが、私にトップを切つてくれと云われていたので、一、二質問をするつもりだったが、私が簡単な質問をして時間を費やすよりもソ連の文化に就ては他の方から、どうせいろいろ質問があることと思うから、私としては、それを聞かして貰えばそれで十分である。それよりも、私が多年やって来た川柳を聞いてもらった方がい

いだらうと思つて、質問と云う形式を捨て左の拙句三句を解説して聞いてもらうことにした。

寝転べば疊一帖ふさぐのみ

人類は悲しからずや左派と右派
俺に似よ俺に似るなと子もおも

い

通訳は例のモスクワ大学のネムゼル教授だったので、私の解説はそのまま訳されず、ごく簡単に意訳されたようだった。続いて他の人達の質問に応じられる訳なので私一人でエレンブルグ氏を独占する訳にはいかない。とすれば句意に共鳴してもらつただけで満足するより仕方なかつた。そこでこれ等の句は皆、ホテルでさしあげた私の句集にあるから改めて味読していただければ併わせに思う旨を告げて打ち切つた。

最初、自分を紹介するのに「私は川柳家です」と云つたが、通訳

のネムゼルさんが一寸首をかしげられたら、エレンブルグ氏を狭んで左に居られたリユボーフィ夫人が、ニコ／＼しながらすぐポエツト（詩人）と云われたのはゆかいだった。

それから次ぎ／＼にソ連の文化についての質問が居たが、エレンブルグ氏はイヤな顔もせず気軽にしかもたんねんに答えられた。

この席上で、リユボーフィ夫人に歓迎委員会から桜の花を描いた絵羽織を贈ったら、早速上着を脱いで、絵羽織を着て穴にこ／＼だった。

夜の六時から、中央公会堂で、小野十三郎氏司会の下に、エレンブルグ氏歓迎文芸大講演会が催された。作家の井上靖、阿部知二、評論家の中島健蔵、ロシア文学者の米川正夫の諸氏が歓迎講演を行い、最後にエレンブルグ氏が壇上に起られ大講演会の実をあげられたことは贅言を要しないであろう。聴衆四千余がいきを殺して一言一句も聞き洩らすまいと聞き入っていたことを述べておけば充分だと思

川柳街



★北国川柳大会のこと——北国新聞社（金沢市）の依頼をうけて私が「北国柳壇」の選を担当したのは昭和二十九年の新春劈頭からであるから本年の五月で九々三年五月月になる。歳月の点から云えばまだ／＼浅いが、作品が歳月の進むに従って向上したことは長足の進歩だと云わねばならない。選を担当しているものにとりて、それ以上のよこびはない。大体新聞柳壇の選と云うものは専門誌などの選とは又別な心づかいを要するものである。ただ選だけすればいいと云う訳のものではない。選の仕方でも作家の作品はよくもなり、わるくもなるものである。

新聞柳壇へ投句する人たちは右も左も知らない初心者がかなり多いものであり、これ等の人たちをどう引／＼張って行くかと云うことが新聞柳壇の盛衰を左右するものである。ピン／＼厳選すれば、それ等の人たちは一トたまりもなく散って行く。と云って厳選すれば新聞柳壇のレベルは次第に低下するばかりで紙面ふさぎに過ぎない結果を招く。ここに選者は人の知らない苦心を要するのである。投句家の大半が新聞を繰りひろげ、自分の作品の掲載に胸をおど

らすことを思えばある程度の寛選は止むを得ないとも云えば云えないこともないが、寛選による柳壇のレベルの低下は優秀作家にまさるため思いをさせ、そこにグレンキムの法則が行われることになるおそれがある。

新聞柳壇は投句家のものであると同時に又読者のものであることに考慮を払わなければならない。よい新聞を作るためには柳壇も又よい柳壇でなければならぬ。柳壇が新聞の単なるアクセサリになつてはならない。読者は自ら作る相当な鑑賞力を持つものであるから、それ等の読者を無視して柳壇の存在はならないたないのである。私は「選後評」や「選後に」と題して常に、作家に指導目標を指示して来たのも、斯うした読者をソロバンに入れていくからである。

北国柳壇はたしかによく来た。更によりよくするために、投句者と膝を交えて語ることを痛切に感じていたが、いよ／＼九月八日に北国新聞社主催の下に北国川柳大会を開催してまろうことにした。何れ詳しいことは後報するが会場は北国会館である。地理的に近い人たちは云うまでもないが少々道は遠くても斯うした機会を与えられた際、道のために万障を繰合せて出席して欲しい。この会には大阪からも出かけてゆく人たちがいるから、それ等の人たちとの親交を深める意味からでも多

数の出席をのぞんでいる。★路郎選集「私達」売切れ——選句に、印刷に、製本に随分と苦心を払った句集であっただけに僅々数ヶ月で売切れたのも偶然ではないという自負も多少はあるが、それでもこどもがよろこぶようなよろこびを感じている。それからみんながウンと協力してくれたからである。よい教訓をうけたではないか。これからのむ。

★次号は古稀祝賀特集——私は西暦で一八八八年七月十日に生れたので、今年が古稀になるそうだが、それで柳友がみんなで見つけてくれるとのこと。不朽洞会では役員たちが会の準備でんやわんやの騒ぎである。

目を忘れて川柳のために働いている私に云わせると、六十九の次ぎが七十で古稀だと云われても、ピンと来ないが、いつまでも健康でみんなの顔が見られるのはユカイだから何んとかかんとか名目をつけて、みんなが寄ってくることは大いにのぞましいことである。

そんな訳で祝賀会をやっていただくのに雑誌の方で手をつかねて見ている訳にもいかない。そこで雑誌の方も古稀祝賀特集号を出して大い

御座敷 北京料理

黄鶴樓

心斎橋筋八幡筋東入
電(75)八〇一(27)九〇一番

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

積水化学
本社 大阪市北区宗是町1

にその気分を出そうと云う訳である。既に各地から特集原稿が寄せられ、編集部もてんてこまいの形だ。(路)

古稀祝賀増大号 特価百円千八円
但し半力年以上の前金購読者には
自祝価五〇円千八円でお頒ちすること
前金切れの方は至急お払込のこと



源義仲(三)

富士野鞍馬

その後、義仲は、院参する
とき、牛車に乗ったが、その
牛飼は、前に平宗盛が使って
いた牛飼だったので、意地悪
く、牛に鞭をあてたからたま
らない、乗っていた義仲は、
牛車に馴れないので、仰向け
に倒れて、蝶の羽をひろげた
ように袖をひろげて、手をあ
がいて起きられなかった。そ
れで義仲は、「やれ小牛ごて
いよ」と田舎言葉でいったが
牛飼は、車を早くやれという
のだと聞きちがえて、そのま
ま五六町も走った。牛車は走
るものではないのである。そ
れから、院の御所へ着いて、
車を下りるのは前から下りる
のを後から下りた。この醜態
も川柳に詠まれていて、

御所車義仲いっそ危ながり
(タル三九)

御所車初めて乗って恥をかき
(万天元)

車でかけおいたは木曾義仲
(タル三一)

馬の気で車に乗って笑われる
(〃 十四)

車に酔って大内の笑ひもの
(〃 十三)

みやびやかなる車からとさら
落ち
(万安五)

等と、落ちたことにまでされ
ている。

牛飼の何を笑ふと樋口云ひ
(万安五)

そしてその牛飼は斬られたの
であった。また、

五つ緒で氏より育ち笑はれる
(万天六)

五つ緒の車はええが大喰らひ
(拾 十六)

「五つ緒」というのは、五条
の風帯を下げた簾のことで、

それをつけた牛車をそういつ
たのである。

ひそひそと車の噂京でする
(万天六)

と京都中でわらわれた。

また、法皇の使で、義仲の
部下が、市内で乱暴をするの
をしすめよとの仰せを、裁判
官といわれていた若岐の判官
朝康が、義仲と対面したが、
その時、義仲は院旨の返事も
せず、

「そもそもわ殿を裁判官という
は、よろずの人に打たれたるた
か、張られたるたか」
と問うたので、朝康は怒
って、急ぎ帰り、

「義仲をこの者にて候。早く追
討せさせ候へ。ただ今朝敵とな
り候ひなむす」
と申上げた。

ぼんぼんと裁判官木曾の諷
(タル一〇八)

一つばいをして木曾殿は憎ま
れる
(万安七)

こういうこともあって、十
一月十九日には、法皇の御所
法住寺殿に、裁判官朝康が軍
の行事となって、二万の兵を
集めたが、義仲は、兼光、兼
平等の諫めもきかず、それを
焼打した。そして、四十九人
の公卿を免職して藤原師家を

大臣、摂政にしたのであった

信濃でも京へ出たのほすない
也
(タル二二)

大きな内でぞんざへる信濃者
(〃 二〇)

これより前、閏十月、平家
の軍は、山陽、南海を討取っ
て、讃岐の屋島に在ったのを
義仲は追討に向ったが、備中
水島で敗れ、平家は播磨へ押
渡った。又播磨の室山でも負
けて、義仲は京都へ逃げ帰っ
た。

そこで、関東には頼朝が居
り、西には平家が睨んでいる
ので、義仲は、平家と和睦し
て、共同で頼朝追討に向うべ
く、申入れたが、断られた。

平家追討の時とは風かはり
(拾 五)

十二月十日に義仲は、法皇
を、六条西洞院の、わが宿所
へ迎え、勝手に人々を、色々
に任官させ、横暴振を發揮し
た。それで、寿永三年の元旦
の、清涼殿の小朝拜の儀式も
行われなかった。

朝日さす大内山のむつかしさ
(傍 三)

禁庭へ暫く悪い朝日さす
(万安七)

とその横暴を詠んでいる。

「平家物語」に

「同じき正月十一日(寿永三年)

木曾の左馬頭義仲、院参して、
平家追討の為に西国へ発向すべ
き由を奏聞す。同じき十三日、
既に門出すると聞えしかば、鎌
倉の前の右兵衛の佐頼朝、木曾
が狼籍しつめむとて、範頼、義
経を先として、数万騎の軍兵を
さし上せられけるが、既に美濃
の国、伊勢の国にも著くと聞え
しかば、木曾大きに驚き、宇

味の七-コ

モダン 川柳

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい

治、勢多の橋を引いて、軍兵ど
もを分ち遣す。折ふし勢こそな
かりけれ。まづ勢多の橋へは、
大手なればとて、今井の四郎兼
平、八百余騎にてさし遣す。宇
治橋へは仁科、高梨、山田の四
郎五百余騎で遣しけり。一口(い

もあらぬ)へは、伯父の志田の三郎、先生義教三百余騎に向ひけり。

とあり、その時義仲の手兵は千騎ばかりであったが、義経の軍は二万五千騎といひ、一月二十日、宇治川の南岸に着いて、陣を布いた。有名な、佐々木高綱、梶原景季の渡河先陣争いはこの時で、

白黒の馬で宇治川先手後手

(タル九四)

と川柳にも詠まれ、この先陣から続いて義経方全軍河を渡り、義仲軍は敗退した。

「平家物語」に、

「宇治、勢多破れぬと聞えしかば、木曾殿は最後の御暇申さむとて、院の御所六条殿へ馳せ参る。木曾門前まで参りたりどもさして奏すべき旨もなくして、取って返し、六条高倉なる所に始めて見そめたりける女房のありければ、そこにうち寄つて、最後の名残惜しまむとて、とみに出でもやらざりけり」

と書かれ、恣人と最後の別れを惜しむという義仲でもあった。そして義仲は、うまくゆけば、法皇を奉じて西国へ落ちようとしたのであったがそのうちに義経は、堂々と六

条の院の御所を守護してしまつた。

義経に追われ、六条と三条の間の加茂川原で敗戦の義仲は、わずか五騎となつて、近江路へ逃げる途中、勢多で敗れた兼平に会い、そこで敗残兵三百騎ばかりを集めたが、また範頼の大軍に包囲され、兼平と二人で落ちゆく途、粟津が原の深田へ乗馬が足を引っこんだところを、遠矢にあつた、最後をとげた。

七月川柳祭 路郎先生古稀祝賀川柳大会に就て

★川維の年中行事として多大な人気をよんでいる川維川柳まつりが本社では本年は七月七日(日)に路郎先生の古稀祝賀会と共に開催される。就ては川維各支部並びに川維系各会は全国一斉に路郎先生の誕生日七月十日に賑々敷句会を開催されたい(万一この日が差支える場合はその前後の日)★この日には特別兼題(路郎出題並びに選)が一題課される。課題は各会宛に後報する。この特別課題の第一席入賞者に路郎賞を、そ

の所属支部又は川維系会へ優勝額を贈る(額には翌年の川維川柳まつりの二週間前に返還すること)★特別課題は一人三句まで、提出句はタテ六寸ヨロ一寸二分の柳箋に一句ずつ読み易い書体で書くこと、その裏面に句主の住所・氏名・雅号及び所属の会名を明記されたい。各会はこれを取纏め七月二十日迄に本社の特別課題係宛に送ること。提出句は当方で更に清記(無記名)して路郎先生に選をお願ひする。★右の外に規定はな

川柳手拭 (路郎揮毫)

一枚八〇円(送料共)で希望者に頒布する。予約締切六月末日限。一人で数枚申込みまれてもよい。なるべく各支部でまとめていただく为好都合です。代金は申込と同時に送付されたい。(切手代用可)

金泥集

麻生 霞乃 選

課題「借金」

遠筆がなおさら淋し借用書	きさ子	借金をする気綺麗な娘に育ち	知恵美
地下足袋の泥借金を返すまで	同	よう貸したもんやと借金あまね	沙智子
借金の相続をしてへこたれず	同	借金がそろ／＼ひびく二号邸	メ女
借金してからはつれなく扱われ	梨花	借金を妻にまかせて逃げて	ひさみ
借金した方の強気に皆押され	同	借金をした事にして家を建て	一栄
借金の高までナンパウで死に	同	借りたばつかりに敷居が高う	美喜
借金が重み万針たてなおい	美保	借上り手嘘も綺麗な一夜漬	霞乃
名を借りて別に一口金を借り	同		
借金へ苦しまぎれの宝くじ	清子		
金借りて置いて債鬼などと呼び	同		
呑みなやと云わね借りた金で	若芽		

利子利子で元金程の金になり 徳子
 借金も納得ずくの婿が来る 奈良子
 借金を買ったような気で遣い 都詩子
 借金等とんでもないと金を貯め 悦子
 運ぶ足借金取りのこんのよさ 香月
 お見舞に借金したと云えぬ金 綾女
 信用があつて借金かさんで来 純子
 借金の印紙を舌の上にのせ 河豚王
 かいしよでして借金を鼻にかけ 史子
 借金を苦にせぬ夫一家無事 スミ子
 裏口から来て百円を借りて行き あやめ
 借金がかさんでやつた無理心中 文子
 催促をすれば逆ねじ食わして来 風の子
 借金をしても止めない酒競馬 白美
 借りた金でも彼女にもつて 花鶴美
 借上り手嘘も綺麗な一夜漬 霞乃



川柳第二教室

没になつたわけ

麻生 葎乃

本誌へ投句をされて、没になつた句を少しばかり見せて貰つた。ざっと一渡り読んで見ると、没になつた理由は色々あるようである。これを詳細に説明すれば、幾項目かに分類せなければならぬ事になるので、先ず大まかに三通りに分けて見た。

第一は内容が平凡である事。第二はあまりに正直過ぎるスケッチである事、第三は調子が洗練されてない事である。

第一の場合

内容の陳腐、平凡は作句経験の浅い者の最も陥り易い缺陷であつて、多読の外にこれを防ぐ方法はないのである。だから先輩が詠み古している句を一時も早く知ることである。

宿帖は夫婦と書いた温泉の香り

待ちぼうけ伝言板に書く未練

右の二句は凡想の典型的なものであつて、川柳入門の初期には、必ず、誰しも一度は考えて見る着想である。

殊に伝言板の句などは、未練と云う様な抽象的な字句を使用せず、具体的にもっと生き／＼としたおかしみが、過去の作家によつて詠まれていた。詠み古された句は惜気もなく捨てる勇気が欲しいものである。

第二の場合

見た事を正直に、其ままだ散文体に書き綴つた句は、川柳の観点に乏しい句である。

吉野山だんご買わずに桔梗買ひ
教壇へ立つ先生は固い人
夜桜もまた格別と飲み交し
錦帯橋降りて渡れぬパスの中

右の教句には、川柳的の見地は何処にも見当らない。

団子を買わずに桔梗を買つたとか、夜桜で酒を飲み交したとかで備忘録の一端に過ぎない句である。錦帯橋の句は句主のボジションの説明であり、「教壇」への句は教師の普遍性が描かれていただけで、普遍性の中から特異性を掴み出していないので、唯の叙述文であつて穿ち味がないから何の変突もない句である。

あつた事、見た事をスケッチするにしても、川柳は此見たまま、有つたままの事を、一遍裏返したり、捻つて見たりする必要がある。作句練習の足りた人は、此有つた事、見た事を殊更に、ひっくり返して見なくても、初めから裏返しになつた影象が網膜に映つて来るのである。

私が先に、述べた川柳の見地とは、皮肉味、人情味、諷刺、おかし味などの調味料を加えた自己の思想であり、批判的な物の視方を指して云うのである。

自己独特の思索なく、批判的分子もなく、人間味もない句は恰も日記の一行であり、法律の条文に均しいものである。

第三の場合

調子がなだらかであつたり、或は峻厳であつたりして、句材にふさわしい装いである時は、つまら

ない事を詠んでも何となく心ひかれるものである。それは字音が持つ音律が一つの情緒をかもし出しているからである。これと反対にゴツ／＼して締りない句は内容の妙味をそくものである。これを見ても、我々川柳家は読書によつて語彙を豊富にし調子をととのえるのに都合のよい音質の同異語を撰採すべきである。

高校は汽車でのんびり遠足に花見だと云うのに病院通いと花見だと言ふのは、まだ云いたい処を、途中でちよん切つた物足りなさを感じさせる句である。

前の句は「行つた」と云う動詞の省略であり後の句は「淋しい」と云う形容詞の省略であつて、なかくても判らない事はないが、附け加えても効果の上らないぢぢむさ

質疑に答える

清水 白柳子

「無記名制の是非」

河井 庸佑

雑詠等は記名制なので、ある程度そのレベルによつて抜かれることもあるでしょうが、句会では無記名制なので新人の没が相当あるようです。句会が句の道場なら、もう少し新人の勉強になるような

選の方法がないものでしょうか。
◇ 句を選する場合に選の仕方について幾通りもあると思います。普通、選と申しますと句稿に作者名があつてもなくても、そんな事にこだわらずに集まつた句稿のうちからすぐれた作品を選び出すと言つのが選の方法であります。特に指

お酒の前後に...

メルチオB12錠

25錠 150円
55錠 300円
100錠 500円

二日酔・悪酔
肝臓疾患...

ウロコ印
田原薬品

導的な意味を持つ選であります場合
合は必ず作者名がなければなりません。
選者はその作者の句歴或は個性を知ってその作者の伸びて行く方向を、選を通じて指導して行くという方法であります。

御質問は「無記名制の是非」ということでありますが記名の良否は簡単に割り切ってしまうわけには参らないのであります。仰せの通り、雑詠欄(本誌では「川柳塔」「近作欄」)では指導的な選をせられてゐるわけでありまして、その指導によってすく／＼と伸びて行く作家が数多くありますことは、選の仕方が如何に重要な意味を持つものであるかということを物語っているわけでありま

す。
句会の場合は、句会の性格を二つにわけて考えることによつて選の方法なり記名制の是非が論ぜられると思ひます。句の練成道場としての句会では、無記名の句稿によつてどこまでも句の練成をせねばなりません。こんな時初心者の句が没になりやすいことは事実ではあります。一面に於て初心者の着想が群を抜いて入選した時の喜びは又一生を通じて忘れることの出来ない感激を得ることになります。私事になつて恐縮ですが私なども大正十三年四月の第一回

金沢川柳大会に初めて出席した時
天位に入選した一句によつて川柳に
つながつてゐるわけでありま
す。

句会のもう一つのあり方は初心
者指導、或は研究会といつた方法
であります。これは重に二十名
程度か又は小人数の支那句会な
で行いたい選の方法であります。こ
れは必ず記名しなければなりません。
それによつて育成指導したり、
句会の持ち方であります。小集句
会のあり方の一つの例として玉造
支部の句会の方法を申し上げます
と、兼題は一題、席題も一題を原則
として居ります。出句数は五句制
限ではあります。初心の間は制限
して居りませんので出来ただけ出
して居らつて居ります。句稿は全
部記名することにしてあります。

選句の披講には選評をつけること
にして居ります。そして没句も全
部披講して何故没にしたかを批評
することにしています。ですから
句会の時間殆んどを披講に費やす
ことになるわけですが没句の批評
には作者からの質問も出まます
し、又出席者の中から別の批評も
出て、作者も選者も非常に参考に
なり勉強にもなるのであります。
こうした指導的な句会は記名制で
なければならぬと思ひますが、

研究会などで句の討論をする場
合、無記名でなければやりにくい
と言ふ点もありますから、句会の
性格によつて、記名、無記名は句
会の主権者が適宜定められて、句
会をよりよきものにするよう心掛
けてゆきたいと思ひます。

◇ 質問は——
大坂市天王寺区宰相山町
一四七 清水白柳子氏宛へ
(戸田古方氏のご都合で本号の作



・方正医博渡米記念。
中央部の人が眞崎方正氏、その左が
路郎、右が岡先生

句指導は休講しますが、阪乃女
史、白柳子氏に本欄を飾つていた
きました。——(編集局)

不朽洞 各理事及び
川維各支部へ
路郎先生
の古稀祝賀川
柳大会ならび
に古稀祝賀特集に關し、各理事及
び川維各支部長宛に協力方につき
依頼状を五月七日附で発送。

古稀祝賀協議委員会——五月十
五日、中島生々庵居で路郎先生の
古稀祝賀協議委員会が開かれ下記
の諸氏が出席された。生々庵、葉、
多久志、文蝶、梅里、潮花、古稀
祝賀会に對する準備と次回の常任
理事会の日定打合せ等。

常任理事会——五月廿五日(土)
午後七時から南区三休橋の中島生
々庵居で開催することとなつた。
議案としては路郎先生古稀祝賀会
打合せの件、古稀祝賀増大号に關す
る件。

福田安夢氏(正会員)は五月か
ら維持委員に推薦された。▼吉岡
草白氏、寺元貞旬朗氏は家庭の都
合により退会された。

★新会員紹介——五月入会
梅木 宗一氏(金沢市)正会員
一三三氏推薦

田中蛙眼子氏(鳥取県)正会員
美笑氏推薦
社の黒板

★川柳雜誌米子支部の事務所を下
記へ移した。米子市岩倉町三三

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識!
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!
明色アストリンゼン
桃谷順天館

心齋橋大丸
北ノ辻東入ル
電話(27)三八八六〇
三三二一九
田毎荘

雑筆

春秋

川柳身辺記

木山 遠二

酒と空気

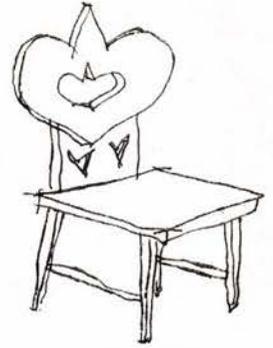
先達のある週刊誌に、東京作家クラブ主催の酒蔵パーティーのカメラボが載っていた。一行五十名からなるお歴々の、そのうれしそうな写真を見ていると、ついこちらも愉快になって、

「五十人で一体どれくらい呑んだことだろうな」

傍で繕い物をしていた家内に私は話しかけた。

「そうね……でも二升が四升になる時もあるんだから見当つかないでしょう」

二升が四升とは、川柳並木会でのことである。三月十一日の並木会創立二週年旬会の後、手料理で祝杯を上げた。酒は二升入用の見当だった。二合平均の十人で二升というような大雑把な計算ではなく、誰は一合五勺で真赤になって寝てしまおう、誰は腰を据えてかかると四合はいけるなどと、それぞれ



れの酒量を勘考して、キチンと出した数字であった。それなのに苦もなく四升平けて、オヤと皆で呆れた訳なんだが、それはその場の空気が物を云ったのではあるまいかと思う。割烹着の細君連中までが座敷へ上って来たことからして、よい空気だったことはいふまでもある。

カメラボには川上三太郎先生姿も見えたが、吾々の二級酒と違って、しぼりたてのもの来ては又格別であったろう。勿論空気よさもハッキリ撮れていたので相当いけたであろうことは想像に難くないのである。

酒ぐせ

私は酒好きという程ではない。どちらかと云えば饅頭へ手を出す方である。だがすすめられれば辞退せずに呑む。呑めば愉快になる癖が出る。酒ぐせにもいろいろあるが私の癖は、誰彼となく捉まえて、矢鱈に胸襟を披いた風なことを並べたてる。そして有無を云わせず相手を褒め上げる。誰しも面と向ってべら棒はほめられるな

ど、うれしくないに決まっているがこちらはそうしていい気もちになるのである。

酒ぐせを根こそぎ出していい

機嫌

「聞いてもらえないわ」

そうした後で家内がいつもこぼすのである。云われるまでもなく醒めると必ず照れくさい思いをしたり、臍をかむのだが酒ぐせというものは中々改まるものではない。

昔から「酒酔本性を違わず」と云うが、そうだとすれば、酔った時が地金であって、平素が鍍金ということになるのではあるまいか。堪らないことだが、どうもこれは当っているらしい。

そこで、それならば……と私は思うのである。——これからウンと修養を積んで、私と云う人間を錬り直したならば、酒ぐせも亦立派なものになるのではあるまいかと。

近作族は思う

河井庸佑

五月号の特集「私の作句法」はホームラン説物だっと思えます執筆者はいずれも好作家として柳名高い人だけに、教えられるところが大きい。こんどはこうした特集をドシ／＼発表していただきたいものです。

雨の日に、雨に打たれて実感をその兼題「雨」にもり上げたという豆秋氏。

川柳の抽斗といわれる水客氏でさえ、二年余りもかかて一句もされた話なんか、感銘深いものがありました。それに川柳塔の次のページに豆秋氏。近作柳樽の次のページに水客氏と、ともに近詠を眺みおわたところへ特集「私の作句法」を組入れたあたり編集の苦心も買いたいものです。

本社旬会へ始めて出席したころは、三カ月に一句ぐらいより抜けなかつたが「私の作句法」が間違っていたようでした。両氏のいわゆる作句法を座右の銘として今後の私の作句法を更めたいと思っています。

最近阿倍野支部へ勉強に出席しました。この阿倍野支部は全国でも屈指の強豪揃いで、まったく私のような新参者は息のつまる思いがしました。大方川柳会のベスト10のうち五氏までが阿倍野支部の人たちであり、夏場所天位番付の上位陣八氏うち四氏までがやはりそうであり、またそれだけに諸氏の作句態度は水爆的です。私はこの道場でミツチリたたいてもらって、本社旬会へのぞむ決心をしました。

菊沢小松園、須崎豆秋両巨頭を始め、路郎先生門下の俊鋭がズラツと並んだ充実ぶりは正に天下の壮観です。ここで感じたことほど

なたも路郎先生に忠誠（古い言葉ですが）を誓う人たちがばかりであったことです。言いかえれば川柳々という大木の、それが枝であり葉でありましょう。こうした一身同体的な結びつきが、いずれも作句の上にあらわれて、ここに名作家陣営を築かれたゆえんがあるのでしょうか。

古豪は新人を愛し、新人は先輩を尊敬する美風も「川柳精神」というものでしょう。新人を愛すという言葉をつかいましたが、甘え

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四四番

さすというのでありません。力士が先輩に目をかけてもらうことはけいしい稽古をつけてもらうことだそうだから。

近作柳樽には十年、二十年というベテランもおられるようですが私のような新参者は、なか／＼川柳という正体がかめません。

川柳立ち話 (第2話)

下積み時代

句は西尾葉氏選「下積み」より

不二田一三夫

下積みがコツ／＼と穴をあ

(水茶)

け

下積みは神を信じて疑わず

(幽王)

怒らない様に下積み慣らされる

(文秋)

下積みの今年も無遅刻無欠勤

(立兒)

こういう純情型のなかから、
表彰の一人下積みから見つけ

(十悟)

と、いうことなるろう。

映画の雑誌社をやめて、直ぐに

破産したが本業の貧乏印刷の若

大将でおさまっていたころ、元い

つしよに仕事をしていた編集長の

久保田たつを氏から、松竹下加茂

の宣伝部長になって生活も落ちつ

いたから、一度京都へ遊びに出て

こいという葉書をもたらした。久保

田氏は秋田雨雀や中河与一等に師

事して、カッドウ屋(映画人)に

は珍しい真面目な人だったが、私

はこの人に三ヶ月間のサラリーの

貸しがあったのである。

林長二郎(長谷川一夫)の人気

もどうやら本格的に出るだろうと

いう久保田氏のカンで下加茂

誌を借金して創刊した。その三号

までの苦難時代をサラリーをもら

わずに働いた私に、すくなくらず

恩義を感じていてくれたようだ

た。

こういうイキサツがあったので

久保田氏は非常に歓待してくれた

ものである。

その頃の映画スターでの人気頭

は、目玉の松ちゃん(時代映画の

始祖、尾上松之助)と百々ちゃん

(市川百々之助、現在は百々木直

という東映の脇役専門)だった。

その百々之助の後援誌をちょっと

手伝ったこともあったので、今日

の大スター長谷川一夫の長二郎が

「大阪の兄さん(百々之助は二才

年上で先輩でもあるから)による

しく」

と、月形半平太(初演の)の扮

装のままで愛きょうをふりまいた

ものである。

久保田氏宅で夕飯を食べている

時、下加茂の大部屋の指導者であ

る三枚目役者木曾十三郎氏が可愛

い少年のお弟子さんを連れて遊び

に来た。浩ちゃんと呼ぶその少年

俳優に、たばこだったかを私は買

いに行ってもらったが、気強く

「ハイ」と、飛ぶように出て行く

この少年俳優が、今日の松竹の下

ル箱高田浩吉だったのである。

師匠の木曾十(こう呼ばれてい

た)は、古参格ではあったが、名

を遂に売らずじまいだった。

下積みの見果てぬ夢を子に託し

(どんたく)

★

もう辞めるやめると下積みまた

辞めず (多久志)

と、いうのがあるが、下積みが

全部辞めてしまったら「幹部」と

いう文字も辞めてもらわねばなる

まい。

前号で書いた親分印刷にいたこ

る、私の下で働いていた山村高義

という唄好きの少年がいた。当時

には「素人のど自慢」なんてのが

なかったが、もしあったとすれば

カネ三つ級であった。特に浪花節

がうまかったのも、親分(印刷所

主)が浪曲家上りだったからかも

しれない。親分の旧師、吉田大和

之丞の妹に小奈良という関西女浪

曲のNO.1がいた。その小奈良

が元女と改名したころ、唄好きの

山村少年は本職の版下画工をやめ

てとうとう元女師のお弟子さんに

なっていました。

半年ほどして逢った時には、す

っかり「のど」を破って浪曲家ら

しい、しゃがれ声になっていた。

よほど修業がつかったか、おも

いなしがすこしやせたようであ

る。なれない炊事から拭き掃除ま

でさせられ、何の道でもそうであ

るように、内弟子になったから

で、師匠から朝から晩まで稽古を

つけてもらえらるのではないから

修業の道のけわしさがわかるよう

な気もして、この少年浪曲家の一

日も早く真打ちになるように祈

たものである。

彼が紀州方面へ巡業について行

った時に初舞台をした。農村相手

の小っぱけな劇場だったが、入り

はまず／＼とあったところだ

た。曲師(三味線)は師匠がやっ

てくれることになって、屏風のか

げから指導してくれるのである。

読み物は「夜討ち曾我」だった。

「お客の顔は西瓜と思え、西瓜島

の中で稽古をしていると思え」と

はいつも言われてはいたものの、

さて舞台に立ってみると、不甲斐

なく手足のふるえや心臓の早鐘は

どうすることもできなかった。

ノドをうるおすコップを手にし

て、扇子を半開きにしながら、そ

の内側で水を飲むのだが、それを

どうウロタエタか、扇子の外側へ

コップを持ってきたものである。

この仕事は落語家のよくつかうテ

だが、この場合は真剣であった。け

に客席からドツとくると、さす

がの少年浪曲家、すっかり上っ

てしまったのである。さあ、そう

なるともういけない。節調の乱れは

曲師の老練さで救えるとしても台

詞が出てこないのはどうするこ

ともできない。

「オイどうした! 文句を忘れた

のか!」

と、観客席はどうせ聞いても聞

かぬでもよい三番叟だがヒヤカッ

半分で騒然となる。

泣きペソをかきながら、舞台で

立往生している彼の耳へ、屏風の

かけから師匠が

「飛んだ、飛んだ!」

と、忘れた箇所は飛ばし、どこ

からでもよい語り続けよと指令を

発したのだが、もうそれすらも耳

に入らなかつた。

「さア飛んだ、飛んだ!」と云う

師匠の声がやっ／＼と耳に入った。

よし、ではこれまでと。彼は

ズカ／＼と舞台の中央へ小走りに

出て、観客席目がけて、ホントに

飛び下りてしまったのである。ト

ンダ「飛んだ」の勘違いだった。

浪曲の三番叟ほど辛いものはない

と、彼は述懐するが、その頃私

の友達で大阪相撲の朝日山部屋へ

入門したのがいたが、禰かつきほ

ど苦ししいものはないと彼も言っ

ていた。

下積みの無口がいつそあわれ

なり (栗)

(1957・4・30)



集路一

秀才

市場没食子選

秀才は汽車から故郷を見て通り
 秀才がずる／＼と汚職する
 ウインクをしても秀才知らん顔
 秀才へもう次の椅子極つてい
 秀才の部屋の灯りがまだ消えず
 背のぐいことを気にしている秀才
 秀才の新人凡の凡人で
 秀才もピリも同じ学士号
 秀才が画一教授ませかえし
 秀才にも委せられない鍵があり
 失恋がもとで秀才くれてくる
 秀才も総理となつて実を結び
 赤門え秀才の顔どつと来る
 秀才の誉も今は閉園の身
 秀才の悪筆ぶりに眼をみはり
 出来すぎる子を学ばせる手内職
 秀才と言われて重荷背負され
 裏街道知らぬ秀才頭打ち
 秀才と云われて友の近寄らず
 就職難秀才だけに引き抜かれ
 両親に似ぬ秀才を不思議がり
 秀才が出て寒村の名も知られ

周甫 越山 幽谷 牧人 陽子 沙智子 千容 高史 夜潮 春光園 与根一 笑太 幸路 俊江 辰始 丹詔 晁康 豊年 春雄 東雲楼
 (佳)秀才の科学戦争へ利用され 光一
 (佳)秀才と言ふ鼻すじが冷た過ぎ 義夫
 (佳)世とは何か秀才自殺する 不二
 (佳)秀才が私大入学それもよし 静観堂
 (佳)それ程でない秀才を鼻にかけ 一休
 (佳)おい秀才と親分こき使ひ 芳仙
 (佳)秀才がピリで出たのに使われる 三林坊
 (佳)秀才はレデーメードで入社する 木魚
 (佳)往年の秀才にある運不運 一十
 (佳)秀才が発言をしてケリとなり 一雨
 (佳)肺病んで秀才型のまゝで逝き 黒天子
 (佳)秀才と云う名に期待大きすぎ 花奈女
 (佳)秀才が軽く入試を落ちてくる 一兆
 (佳)秀才の一人中退惜しまれる 凡茶
 (佳)算盤に合わぬ秀才借りがあつた 秀三
 (佳)弟が秀才姉はまだ勤め 実男
 (佳)秀才を育て雑役婦で終り 蓑流
 (佳)秀才へ期待学費の恩を売り 三四郎
 (佳)秀才が出て分校が知れわたり 春吉
 (佳)出来る子を持ちPTA熱心な 八九寸
 (佳)秀才の前途を阻むレントゲン 永断
 (佳)眼鏡はずせば秀才さびし貌だつた 葉光
 (佳)秀才が大器 晩成型を褒め 雄々
 (佳)パーで手帖出して秀才叱られる 一進
 (佳)秀才がストを冷たい眼で眺め 鬼美
 (佳)秀才の頭を借りて解くクイズ 進之助
 (佳)秀才をフ、ンと女びん笑し 芳仙
 (佳)秀才で出て算盤を持って余し 進之助
 (佳)秀才の書架にもコケン二ツ三ツ 光郎
 (佳)秀才の父からあんなドライの娘 七面山
 (佳)秀才が水族館の鯛に似て 静観堂
 (佳)秀才に洒落が通じぬにが笑ひ むじな
 (佳)おんぼろの辞書秀才に愛されて 恵二朗
 (佳)秀才の面影はなし 関に媚び 月都
 (佳)片親でよし秀才の学が成り 味平
 (佳)秀才が不精になでる 乱れ髪 一鶴

インキ

黒川紫香選

一筆啓上インキすら／＼書けるなり
 腹立つた時のインキがまだ残り
 ペンだこにインキが残りたままで逢い
 インキ瓶をち／＼空けてあわてさせ
 夫婦のペンでインキ壺突つかるゝ
 指だこにインキにじませ倦怠期
 赤インキ僕とみんな注意書き
 家計簿にインキの指紋よく残り
 インキ瓶持参で代筆頼む祖母
 平凡に暮しインキもひからびる
 使わない社長のインキ入れ替える
 手にインキつけてた程に仕事せず
 一滴のインキが五割引にさせ
 万年筆借りては来たが出ぬインキ
 畳まで汚してインキよく使ひ
 旅日記旅のインキで書き終り
 インキ壺引つくりかへた声になり
 旅愁また宿屋のインキ借りて書き
 読書欲するインキの匂いがし
 青息を吐く帳尻は赤インキ
 履歴書もインキとなつてはかが行き
 下手な字をインキの故にしてしまひ
 にじんでるインキの涙のあとがあり
 新しいノートインキで書きたがり

祥月 南牛子 恵二朗 同 春光園 一星 与呂志 孝次 光郎 味平 静馬 膳佑 藤波 芳仙 秀三 義夫 俊江 沙智子 隆文 静観堂 丹詔 豊年 春雄 東雲楼 牧人
 (佳)インキだけつけて恋文溜息し 豊年
 (佳)かんじんなところへインキがボリ落ち 陽子
 (佳)スランブへ埃だらけのインキ壺 蓑流
 (佳)祖父はまだインキ馴染りものらしく 実男
 (佳)御仏前のインキにじんだわら半紙 月都
 (佳)吸取紙使えばインキなおにじみ 一十
 (佳)スランブのインキほんぼんためされる 葉光
 (佳)お役所のインキは底にだけ溜り 永断
 (佳)編集部らしい大きなインキつぼ 幽谷
 (佳)勉強家の机インキのしみだらけ 函雄
 (佳)ラブレター書いたインキも同じ色 笑太
 (佳)インキ壺乾いたまゝで永う病み 進之助
 (佳)使うてるインキの色にも好き好み 圭水
 (佳)たまさかの賀状インキで来て 春吉
 (佳)インキの色を覚えてるレター来る 素栄
 (佳)インキ消しの又厄介になる不覚 高志
 (佳)合格のインキがうれし通知来る 三林坊
 (佳)一年生インキ使つて見たくなり 三四郎
 (佳)家計簿の赤字のための赤インキ 昌男
 (佳)主婦として今日はインキに用あり 一角
 (佳)赤インキ青インキ程働らけず 白溪子
 (佳)課長今日気嫌が悪い赤インキ 七面山
 (佳)インキ壺一度は置汚すもの 白溪子
 (佳)インキはまだ乾かぬ釣手へ茶をいそ 七面山
 (佳)インキでは履歴書矢張りしんぞ来ず 巖
 (佳)新しいペン先インキを受けつけず 十九平
 (佳)インキ消し課長もなを借りに来る 雄々
 (佳)インキ二重丸書くだけける赤インキ 木魚
 (佳)インキ子が歩き出したインキを棚に上げ 滝月
 (佳)インキうら／＼かさ靡にインキがついて 不二
 (佳)窓口のインキ片方は空のまゝ 白溪子
 (佳)人)ペン先へコッソリと響くインキつぼ 夜潮
 (佳)天)証文の横で静かなインキ壺 越山
 (佳)軸)絶筆と思えぬ力のあるインキ 紫香

いのちある句を創れ



投稿規定
用紙は原稿用紙
文字は正
確
締切毎月二〇日
投稿先
本社宛

本社 五月句会 (大阪市)

五月七日 午後六時

於 光明寺

ドライな日を五月晴といひ、ウエット
な日を五月雨といひ五月。
ゴールデン・
ウィーク明けのきょう、東京から高志氏
広島からは季賛氏の遠来組を迎えて、つ
くじ咲く会場は青葉若葉の生氣はつら
つ。そこへ「作りますわよ」と女流作家
のご出席が十指を数え、ここかしこに時
ならぬ花が咲き競う華やかさのうちに、
古方氏の句評から新緑句会の幕があく。

句評というより体験の句の鑑賞を重点
において、近作柳榊より鬼美、立兒、梢
月、きさ子諸氏、川柳塔より自句、ひか
平氏、新川柳鑑賞より形水、喜由両氏、
同舟近詠より霞乃女史、各地柳壇より生
々庵博士選九里三氏等の体験からくる句
の良さを語られた。

路郎先生は、エレンブルグ氏に三郎作
や「川柳とは何か」を贈られ、日本の川
柳をソ連で翻訳させるよう努力した話を
青年のような熱で述べられた。世界を行

く川柳も、先生の遠大なるお望みの一つ
でもあり何とか実現してほしいものである。
霞乃女史も英文で川柳を作る研究を
されたそうであるが、「川柳世界を行く」
日も夢ではない。

年命的個人的の変化から、漱石と同じ
ような行き方をするご自身を見つけ、漱
石をもう一度読破したいと川柳の羽ばた
きは強い。川柳漫談のペンの行脚から習
性を語られ、落語寄席の土曜会で会長で
ある染丸師が下足係りまでやり、熱を以
て高座をつとめる話、ダンスのレッスン
場まで行った話等、これが古稀を迎える
人かと、壯者をしのご最近の盛り沢山の
柳話に満場は酔う。

五月の不朽洞賞杯は、水際わ立つ名句
で鳴る正本水客氏が握られた。

(F)

- 出席者 路郎・一三夫・凡九郎・黄娥
・十悟・笛生・いさむ・淀月・水茶・凡
茶・以兆・文秋・梅志・義弘・多久志・
豆秋・花車・静馬・旭・水客・正明・客
遊子・淡舟・賀峰・暁一・高史(大阪)
・水堂・牧人・逸人・古方・杜的・永断
・一ノ十・武助・香林・高志(東京)
・与呂志・操子・生々庵・月都・利武・昌
男・季賛・美恵子・和子・悟朗・井平・
博也・葉乙女・葉・愛論・いわを・好郎
・立兒・小松園・進之助・暇子・繁雄・
梅里・梨花・土佐太郎・浩青・三司・庸
佑・柳宏子・宏子・霞乃

兼題「片親」 麻生路郎選

父に似た子が父を知らぬなり 愛論
片親の今は泣かない子に育ち 三司

片親の死因にまでもけちがつき
片親の苦勞知ってる古豊
採用の通知片親泣いてき、
片親のない子も共にハトボッポ
父親に死なせて見栄をまだつづけ
腹の子を片親にする金包み
ババだけで育ちさみしい十八九
洗濯の雫も母と子の暮し
戦争に触れず母と子強く生き
片親をウラみドライな娘に育ち
亡妻の手がなぐ欲し娘の育ち
片親のぐちは仏間で申し上げ
母のないのが原因とトツア記事
片親の父に浮気のくせがつき
片親へ突然母が出来てくる
片親一人一人の愛血がにじむ
片親の孫の手をひき天王寺
片親と見せまい革のランドセル
片親の弱身五分にはつき合えず
片親で育つ器用をさびしまれ
父なし子鳥の行方へ立ちつくし
御近所の子へも片親気をつかい
片親に逆らうてみて淋しがり
片親がああ臆病にしてしまい

兼題「粗品」(香野氏選) 川村好郎選

覆歴書と共に粗品も届けられ
割前が決って粗品の筆を取り
義理と云う粗品代理が持つて
書きにくい字だと粗品かきやり
合点のゆかぬ粗品がまた届き
商魂は粗品のタオルにある
粗品からききめのあった通知来る
何と書きまします粗品と書いておけ

本当は粗品と書きたくない中身
心ある粗品新聞紙で包み
粗品進呈女ごころは買わされる
銀行で粗品とくられた貯金箱
墨痕淋漓粗品と嘘を書き
張替えた紙の跡さえある粗品
手土産の粗品に無理を頼まれて
粗品につられ財布はたいて来
しょうもない品へ水引だし紙だ
粗品だけあつさり取って貸さぬなり
ほんまの粗品にしきくらしむき
粗品一ツさげて戻れぬほどよまれ
粗品でもよし知事賞の字が光り

兼題「年上」 新川博也選

年上と見られたくない柄を振り
年上の妻は老けとうない化粧
年上をサアサアサアと床柱
一〇ワット年上の順に座なされ
年上とほんぼん死ぬの生きるご
年上の女やっぱり嘘の恋
年上の女なんでも買うてくれ
先輩と呼ばれる度におごらされ
年上の妻に目立つた深いしわ
へちやだろが年上だろが持参金
年上の部下コーヒーへ又誘い
年上は損を思ふ「おやつ」分け
年上のさすがと思ふことを云い
年上のこゝらあたりで取けておき
年上が近所の噂気にしだし
弟を年上に見る禿げ具合
籍入れて妻が年上だとわかり

- 永断
葉乙女
義弘
悟朗
旭
水客
豆秋
水客
高史
辰始
柳宏子
多久志
六龍子
幽谷
博也
繁雄
与呂志
博也
千里
季賛
小松園
水堂
水客
路郎
いさむ
小松園
いさむ
梅志
賀峰
与呂志
昌男
豆秋
飄太
美舟
小松園
与呂志
香林
永断
井平
一三夫
六龍子
古方
幽谷
好郎
梅里
辰始
辰始
辰始
川柳堂
立兒
浩青
須賀太
逸人
柳宏子
遙峯
好郎

年上の女給辻占信じ切る 愛論
 年上の妻が養子の様に見せ 生々庵
 ほめられて年上の子はすわりかえ 義弘
 年上の女に恋は云い易し 一ノ十
 年上をたてるところで立ておき 古方
 年上の意見明治の声になり 小松園
 結局は年上にゆくまともめ役 昌男
 年上の女に自叙伝恋をされ 二三夫
 とぼつちりが又年上にかかつて来 杜的
 年上の仲居に軽くあしらわれ 進之助
 年上にさかろうて見る酒のうえ 黄蛾
 年上の妻ごとごと口を出し 美舟
 年上の妻を米屋は聞きかえし 葉乙女
 年上の妻で恋愛かと聞かれ 牧人
 年上の意見は肚へ聞いて置く 凡茶
 年上の女房ごまかく気をつかい 多久志
 年上が代表として叱られる 豆秋
 年上を残して嫁く身がつかれ 瓢太
 年上が先ず母親の氣に入らず 立見
 年上に聞いていただく酒を酌ぎ 博也

兼題「裏返し」 森下愛論選

裏返し時代遅れの肩の巾の巾 いわを
 明日休むつもりの名札裏返し 多久志
 色封筒裏返し手がふるえ 水茶
 座蒲団の温みひっくり返しとき 文秋
 世帯馴れそれ染直し裏返し 十悟
 腐つても鯛だとお古裏返し 幽谷
 裏返し氣に在るまいが晴着とし 辰始
 裏返し清貧と云う坐り様 生々庵
 裏返しして物事をごてつかせ 水堂
 冷やかさは裏返しでも逃げを打ち 土佐太郎
 裏返し着て表彰の式に立ち 香林
 デザインをほめて裏返しに触れず 淡舟
 あきらめた手は正札を裏返し 梅里
 裏返しの手で王将つめられる 愛論

席題「円満」 正本水客選

円満に見えてかぐちを取合わず 水茶
 円満の秘訣あつさりのろけられ 愛論
 円満にいくはずないとねたまる 庸佑
 円満な人を一枚加えとく 月都
 円満な御人でバネの折れたよう 十悟
 円満でよと云わんばかりの親子連れ 逸人
 円満な夫婦子供に掛りきり 凡茶
 手打式の次第も老妓心得えて 古方
 円満に済んで握手を求められ 逸人
 両陛下御円満と云う手を振られ 杜的
 円満を蝶々雄二に認められ 以兆
 時計コチコチ円満な日が続く 水客

席題「出前」 菊沢小松園選

出前もち今日は旦那だと思ひ 多久志
 素うどの出前に返事口の中 月都
 また旦那変わったなあと出前持 好郎
 頭数数えて注文する出前持 進之助
 交番へ出前がとく家出の娘 愛論
 出前ふと郷愁に似た雲を見る 杜的
 子の無理を詫び雪の夜の出前 生々庵
 あつあつの処を出前は見えてかきり 文秋
 曲り角出前がこけた派手な音 水堂
 0対0出前早よから出たまんま 一三夫
 あこがれの大阪へ来て出前持 豆秋
 すうとんはちやいも忘れて出前 逸人
 不意の客出前の箱を呼戻し 進之助
 二階借りとは聞いてなんだ出前持 以兆
 出前をば思ひきらるホームラン 義弘
 新米の出前という汁のこぼれよう 栗馬
 出前持ちとぎれに風を食ひ 静馬
 出前からきたえた店をよくはやり 文秋
 高下駄においしい湯気をのこせる 昌男
 だんだんに出前の無口知ってくれ 水客

席題「野次馬」 西いわを選

野次馬のスパツプの口を開け 一三夫
 野次馬のがっかりさせた仲直り 生々庵
 野次馬になれず葉桜むしつてみ 瓢太
 野次馬はも少し焼けてほしい顔 多久志
 野次馬といつし主犯話して居 逸人
 野次馬に訊けばワアア知りまん 一三夫
 野次馬へアッアッ売りが来る 豆秋
 野次馬の中の一人は俺だった 梅里
 野次馬の区別のつかぬエキモト 梅里
 野次馬のどれもが閑な顔ばかり 梅里
 国会の乱れ野次馬めいて居り 十悟
 野次馬がとうとう事件にしてしま 花車
 野次馬の一歩手前で落着かず 月都
 恵まれぬ暮しとみえる野次馬よう 香林
 はつきりと云う野次馬をてあまし 賀峰
 拘られても知らず野次馬囃し立て 杜的
 野次馬の中に博士も混じつとり 高史
 野次馬へ喧嘩はあつてなく終り 文秋
 野次馬が水筒の水注いでくれ 水客
 警官も野次馬も去り元の道 笛生



丸山ローソク

野次馬の一人は反対するつもり
野次馬が散って急用思い出し
信号はもう野次馬の目に入らず
野次馬の一人となった街のボス

(YOUU清記)

川 ハワイ支部句会 (ハワイ)

古川麗花麗選

骨太の指誇りたい楽隠居
指庄師の講義も多居眠りし
見せられぬ涙小指でそつと拭く
指先で胸忘れした字書いてみる
好きですと娘は指で輪を描く
訪問を故郷の老母は指を折り
婚約の指輪へ生命賭けた恋
太い指生活の姿覗かせる
指切りもたのみにさつと嫁に行き
満ち足りた気持で祖母はテレビを見
相談にテレビのスイッチ強すぎる
テレビニュース故郷の春へ遊ばせる
テレビ買いあさる日夫婦喧嘩なり
夫婦喧嘩テレビを買って立直り
TVも好みが違い親子揉め
テレビ見た後は按摩のいるおとし
テレビ塔ボカリく息をつき
買わぬ気は隣のテレビよく云わず
テレビあるだけに妾にさんかつき
TVをとめに来た母座りこみ
TVのクイズへほととする答
家屋敷テレビ皿まで月賦なり
大寫しテレビ織など遠慮せず
火の車かくす手段のテレビ据え

川 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓選

新調の姿鏡へぐつとそり
新調がくたびれて来てはつと
新調を着れば値段をすぐ聞かれ
新調の靴がホールの奥に消え
新調に順番があり子沢山
マネキンは新調私に見てるだけ
一と廻り大きなサングラスに
病院のサビース時代洗濯機
病院の下駄なんだか汚なくて
看護婦の来る足音へ横になり
病院を訪えば病人気を使い
退院も間近一杯試してみ
病人は医者苦笑が気に入らず
病院の汁ぬるような湯気でくる
病院で大事がられる不幸せ
病院の窓とは見えぬ高笑い
産声に院長軽く男です
嫁ぐ娘の姿に母は泣き笑い
スタイルが気になる娘盛りなり
新妻の姿やっぱりネギをさげ
アルバムの若き姿のなつかしさ
青春の悩みウエスト六きすぎ
月鏡写せば八頭身に見え
姿見も不用となつて子沢山
青春がはち切つている海水着
晴れ姿見せた程にもない生活し
作業衣の姿々々しきこの現場
作業衣の身にびつたりと美しく
姿鑑皿鉢の中でびんと跳ね
父もんに勝つて見せると子の姿
仲人はこらでよいと姿消し
嫁く姿母は前から横から見
お姿に惹かれず心に惚れました
腹立ちを後姿に見せて去に

爽 博 常 香 裕 子 一 周 坊 千 津 子 康 之 介 信 夫 正 雄 勝 喜 蟠 蛇 義 生 夢 生 大 介 俊 江 蘇 水 朗 子 満 子 千 吉 光 雄 留 子 康 子 良 一 草 舟 勇 利 子 順 之 俊 一 郎 和 子 松 風 醉 雀 寛 雀 温 夫

川 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

この姿見られたくない人に会い
お姿が見える様など便りが来
札束へ私姿を崩すまい迷窓

川 淀川支部句会 (大阪市)

武部香林選

門出しなおすパチンコの花輪なり
遣唐使出ずへその日の羅生門
合図する女襖を細目にし尙平
定食を食べる日妻と差向い幸男
定食へアドバタイズしているそれだけ
見せ惜しむでもない写真紫蘭
氣に添ひぬ人なり世辞を出し惜し
惜しみなき主張を胸のあたりに見
帽子買う自分にたれて鏡鳥雀
鏡あつて人間を馬鹿にする百中園
はじめての酔をのぞきに來る鏡晏子
今朝からは妻の座として鏡視る親生

打合せやはり大阪時間で来山舟
魂胆を笑つてかわす女事務若菜
魂胆があつてくせのまお呑めの千里
魂胆があり口先で奉り香林
女房の見栄の寒餅湯氣を立て水堂
寒餅もつける余裕へ梅の鉢多久志
寒餅といつしは無沙汰叱つて来山茶花
寒餅に春の足音近づいて三十郎
悪友が真先に來る新家庭東洋男
お互いが悪友となつて呑み歩き文児
悪友として妻君におぼえられ葵丘
悪友へ妻の挨拶念が入り幽谷
スカタンにうろたえている新入社礼司

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

相原一善選

苦笑して凶星をこらす手も覚え
苦笑い二号娘と間違われ花村
悪友を妻如才なく追い返し泰三
酒呑みは皆悪友にしてしまひ陽子

品質優良

先カペン

TACHIMAWA PEN



大 阪 市 東 区 常 盤 町 一 丁 目 十 一 番 地
立 川 ペ ン 先 株 式 会 社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画
タチカワ

愛情は醜酔したが家がなし 狂風
 ボマードの匂い皆して叩かれる 飴ン坊
 遅刻はともでしやばり負けてなし 真奇
 ボマードの匂に別離よみがえり 隆文
 こけろな家から出て行くよヤンダ 桃仙坊
 家出する勇氣もなくて夫婦無事 鳳月
 でしやばりへ手頃な夜があてがわれ 香春
 ミス日本小鳥の尿を顔につけ 道友
 結局は母に世話さす鳥を飼い 葵丘
 財産へ小鳥も入れて査定され 幽谷

川 備前支部句会 (岡山県)

濱田久米雄選

二階借りさの庭園見てくらし 竜泉
 今日のおすしお前に似てか甘する 永流
 代々の小庭で今は卵生み 幸仙
 お茶席へ自慢の庭をあけておき 陽子
 開拓地庭から山へつづいてい 葵丘
 庭の松哀し個性は横に延び 万女
 お見合の二人にしとく春の庭 柳風子
 人形の塵を払うているも春 東岸子
 ひな人形ねずみに鼻をやらせり 一声
 人形にはへずりすればなお淋し 操
 人形のおの純情がいまはなし 久米雄
 同郷の所長が村のことを聞き 幽谷
 居ねむりの所長へ名刺とりつがせ 娛句楽
 舌打ちをしたが父ちゃん折れてやり 伊久野
 吉報へ嘘じやないかと念を押し あやめ

川 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満選

花見酒一枚脱いだ胸の線 憲美
 でもあるやないかと一分咲きへ立ち 日満
 い、眺め望遠鏡もよくかせぎ 粗粒

い、眺めもう弁当の場がぶさぎ 耕民
 ウインドのガラスがぐる程眺め 遊星
 観光バスみんなそつちの窓へ向き 茗人
 屋上の眺めに僕の家もあり 三歩
 眺望の良さに意中を云いそびれ 八歩
 景気よく友に奢つたことを悔い 昭夫
 まかせときなぞと悪友景気よし 憲美
 まあ、ですわとお隣りも儲け 白郷子
 チンドン屋景気の中に無表情 酔歩
 い、景気一升ピンを横たえる 八歩

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

辞書飛んで夫婦喧嘩の幕が下り 柔慰士
 陛下には辞典の様な人が付き よし子
 三人も寄つてクイズへ辞書を引き 永断
 貸本のよっぽど儲けたらし表紙 みのる
 芸術と別にヌードがよい表紙 一雨
 表紙一ぱいに大観富士を描き 齊花
 表紙もう見られて顔をよく覗き 凡志
 砂ぼこり妻の晴着が気にかゝり 桃村
 迂り込みホームにさつと砂ぼこり 枝葉
 縁先へ地図を書きたい砂ぼこり 小菊
 中古の悲哀 埃の 後になり ひか平
 アベで見下ろす故郷の狭い道 白猫児
 見下ろせば皆幸福そうなるビルの窓 初穂
 快調のゴルフ砂塵を陽炎に 越山
 見下ろせる位置は先陣の花筵 左文字
 厳然と辞書は飾りのまゝで書架 無鬼

川 木次支部夜櫻句会 (島根県)

藤井明朗報

眺望の桜向うからもほめ 愚人
 迷惑な歩みに桜抱きつかれ 春桜子

桜の樹茂つてお寺俗化する 蜂人
 観光へ十年先の桜植え 明朗
 桜見は隣の庭で唄わされ 長丘
 まだ咲かぬ桜へ駅は花盛り 四郎丸
 降る雨が損とは桜知らぬ事 舟帆
 片思い一本杉が知つて居た 鶏声
 終列車車掌も欠伸うつされる 可明
 片思いいと無しにやせが見え 華雪
 終列車踏切りの灯も無事に消え 綾美
 い、わけの土産荷になる終列車 枯葉
 終列車に遅れもせず三十年 勝美
 改札が頓馬に見える終列車 清夢
 日記から発見された片思い 洋介

川 米子支部観櫻句会 (米子市)

小西雄々報

いざごさの仲も肩組む花の酔 君枝
 晴着から一ひらこぼれた花掃り 天邪鬼
 酔うて寝たせいで夜桜みて戻り 蛙眼子
 酔客を見あきたように桜散り 紅帆
 夜桜に話つきない二人連れ 雄々
 夜桜の冷えて屋台のユツプ酒 一机
 肩書が多く花見も二度三度 進笑
 空瓶が桜の山からころげて来 金平
 夜桜へ人の噂さきさされる 吾柳
 失業の身へ行楽の花便り けん坊
 児を連連れ花見に来たが邪魔な 美喜江
 孫に手をひかれ桜をみて帰り 蘇生
 花びらが舞込む店の賑やかさ 新雪
 夜桜へ胸のかんぬき抜いて飲み 青香
 倅な笑顔ばかりの花の下 すみ子
 花便り七分咲く頃雨となり 詩郎
 桜さくら猫も杓子も混ます汽車 素飄
 葉桜になつて家出の娘が帰り 散歩

色紙短冊
 書畫用は即
 大坂戎ざし
 丹精堂
 ちんせいのてい

川 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平選

貸切りで桜の名所見て廻り 康女
 町内の花見つぎつぎ選挙前 無閑
 安来拳強く宴会顔がきき 怪山
 他人の座へ割り込む酒も花の下 美笑
 本当の花もカフエー少し混ぜ 幸路楼
 ご時世だ寝巻の柄も派手になり 明石
 寝巻着て隣へ行ける間柄 政己
 防火デーと知らず寝巻の五六人 照坊
 両足を投げ出している花疲れと 上郎
 耳遠い祖母の代筆して疲れ 光郎
 浮浪児の疲れ顔に顔に春の風 俊夫
 一坪の花壇に疲れる輪となり 久雄
 気の疲れ幹事は別に呑み直し 醉羊
 母の膝遊び疲れた子が眠り 恒雄
 足弱を連れてユースがまたわり 味平

川 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

ラッパした一升瓶を目で計り六花
夫もう一升瓶へえびす顔義平
貸切ったバスの車掌の生欠伸青児
貸切った座敷と見えるにぎやかき
貸切りのバス小学生の夢をのせ
貸切りのガイドチップの効いた声
末ッ子が長男ですと若返り豊年
秘書ある日社留守長のに大欠伸
欠伸して居るに講師まだ続け
上役へ今日も私欲の品が着き靖博

維川 下関支部句会 (下関市)

サンルーム曇れば僕の気もくもる 半休
ライバルに譲れぬ意地が使い込み 井蛙
値上げ予告団体の客がふえ 季贊
マイク思えらぐらしいゼスチネだ 木公
嫉妬芽ぐむ澄む日はかりでない心 正一
あの頃がついに出る倦怠期 外來雄
のど自慢のびたりちぢんだら 吐川
觀光団二世は素敵と言っただけ 越舟
遼拳戦マイクの良さが巾利かし 自然

石川侃流洞報

魚屋の言訳け沖の時化にする 一規
時化そうな海へ男の意地が出る 樞川
仲裁が照れて戻った痴語喧嘩 九呂平
村八分仲裁隣り村から来 伊三男
仲裁もなく痴語喧嘩つゞけられ 茂美
艶やかに転びスキーの泣き笑い 千里
新世帯予算が狂い泣き笑い 呑天坊
泣き笑いどころか人の気も知らず 雪峰
入選の朗報一家写される ほなみ
朗報に再起の一步踏みしめる 吐泉

戒名も貰うたに息子帰って来 吞喜坊
魂胆の酒と知りつゝ酔うている 藤四郎
酒呑みに嫁くなど妻はあてつゝ 成夫
こゝまでは業と知つて猪口も 侃流洞
酒呑みへしんを惚れた頃を悔い 晃
酒呑みの父へ優等の子が帰る 司楼
酒呑みのいらぬところへ力溜 蘇人

大阪通信病院川柳会

麻生路郎先生選

京都静か懐も歴史の艶を出し 史葉
嬉しさをかくす襖はかたくしめ 竹莊
警察でごろ寝して迄黙否権 康彦
二階借部屋一ぱいにごろりと寝 幸男
すねているごろ寝へささず 幸男
一升瓶持ててごろ寝の花見客 正徳
一張羅のごろ寝女房に叱られる 方正
みおつと鳴つてゴロ寝が目をもじ 春果
ごろ寝した辞書の枕ほそり返り 草右
深入りの腕に手錠の冷ややかさ 夏生
深入りが女一人を不幸にし 春雄
父の例ひいて深入りにさとし 草右
ニタ世帯背負うて彼氏少し瘦せ 路郎

維川 小松支部句会 (石川県)

伊藤茶仏報

駅前で土産の数を確める 清
駅前もぐるり廻れば暗い処 やすえ
駅前には大人並べて団休旗 一進
駅前嫌いな奴の酔いにあい 茶の香
許すとほ言わず初孫抱いてくれ 正柳子
仲直りしましとて言う床を敷き 茶仏

仲直り酒がはいって又荒れる 千太郎
本当の乳房を知らず子が育ち 芳朗
頑固一徹下積みのままで老い 宗太郎
頑固さが祟り職場を又追われ 千里
貧しさに育ち真正直に世を歩き 城南
仲直り出来て肩組む纏のれん 柳三

帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水選

別棟の間借どうして恋芽ばえ 藤本
旦那から間借へ戻す夢がさめ 加名生
風邪引が間借人からうつて来 甲子朗
小説のように惚れられない間借 好祐
間借りして地声いつしか細うた 兼国
折詰を託してからの酒の味 兼乙女
通り雲折詰の味変えて行き 繁三
肩書を奉賀帳は見違さず 一平
見合ではこをほくろに気がつかず 耕山
新妻のほくろを旅の湯で見付け 雅堂
今宵からほくろも見せる差向い 辰始
印象に残るガイドのあのほくろ 九州男
すり切れたネギ 学士五人生み 恵攪子
隠居しても煙たがられている隠居 京一樓
ポリーナスがキールケットへ消えて 利武
お年始に年に一度の顔も見え 花車
支払いはいつでもよと初荷つき 白水

333 川柳会

川村好郎報

一言も妬かぬ女房の気味悪さ 好郎
一言も言わずふくれたまゝ三日 雪山
網帯のわけをこゝでもしやべられ 一葉
網帯を巻く看護婦の美しい 貴山

富柳会 (富田林市)

阿部柳太報

趣味に生く口実女房は家をあげ 紅梅
口実ば辞書の紛失金送れ 星女
口実へ女女としての智恵 高志
吊皮へ今日の口実考える 黙太
子供等が可哀想でとまた娶り 好郎
ひな祭屏のないのも出揃って 隆恵
短冊で済ます長屋のひなまつり 増治郎
菱餅をみんなにらんでひな祭 貴山
隣家より干筆のびて来る日向 周一
日まわりのまに日向を追う背中 とみえ
小春日和病後のひげを剃る日向 東雲楼
病院も満員歌舞伎座も満員 好郎
満員車どこかで猫が鳴いている 柳太

季節一品料理

江戸前にぎりずし

アベノ橋地下映画食通街

大萬

梅里の店

★大万川柳(第七十六回)を募る
兼題「銀行」路郎先生選
締切・六月十五日 旬数五句以内
発表・六月廿一日 (店內掲示)
投句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

編集録音

▼学校でも誰かんだことのない「心理学」を看護婦に講義をせよとの院長の命令で、近頃「心理学」に閑して色々本を読んでいる。中々苦しいがこれは勉強をさせてやろうとの院長のお慈悲だと思つて甘んじて受けている。編集局へ出て来いと言つて下さるのは路郎先生のお慈悲だと思つてやつて来ては、先生のお話を聞かしてもらつて、一つづつ賢くなつて行く……

(春果)

▼このサイダー、アルコールが入つてますね。ああ、林女史、一三夫君と同じものにしてください。誰だね、隅っこで「鼻が、赤いのに」だなんて云うのは。(白柳子)
▼火鉢が入らたら暑いという人と寒いという人がある。ファンがあるかと思つとこんちくしょうという人がある。気のつかぬところから私を見ている人があると思つとおそろしくもなるしおもしろくもある。別に身をつましようなんて堅くるしいことは考えないがこんなことはいえるのも年かい

柳人交歓暑見中舞廣告を募る

八月号へ貴方の暑中見舞廣告を

★一ト口金二百円。幾口でも申込んで下さい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います一ト口金は五分の一段組三行。日着便
★原稿締切は七月五日
★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

川柳雑誌社

な。同い年の白柳子さん赤い顔をしている。なぜのおつても私よりよく輝か知らんと思つたら、おいてるので安心したり心配したり只々川柳の徳をよろこびながら(古方)
▼路郎先生から南北氏の告別式当日のお話が出た。一同先生の追悼吟を聞かして胸があつくな
▼昨年S新聞で「とつておきの話」というカクイ物へ、文壇財界、芸能各方面の大阪ゆかりの人達が登場した。第三話に行友李鳳氏第四話にこの間亡くなつた食満南北氏、第九話に私も出してもらった。今その切抜き帖を出して南北氏を偲んでいるのだが、氏のクイズのような難解な文字は有名だつたそうである。一度氏の原稿の校正をしたか。古稀祝賀号にご執筆願えないのが残念である。5月21日付のN新聞のカクイ物「ズブリ見参」に標語の日本一とか、賞金で娘の嫁入仕度をしたとかと書かれたが気になるのは税務署だ。(一三夫)

新館



堂々 13,000坪の大百貨店として どこよりも良い品を取揃えご提供申し上げます

アベノ上六
近鉄
大阪

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪一名古屋	2時間35分
大阪一宇治山田	1時間54分
名古屋一宇治山田	1時間34分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40 15.40	8.00 16.00	8.40 16.40
8.40 17.40	9.00 18.00	9.40 18.40
11.40 19.40	12.00 20.00	12.40 20.40
13.40	14.00	14.40



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

スタート
着心地のよい

O.S.K.

レディース

株式会社 大坂商店
大阪市東区西津田一丁目二番地
電話 (94) 1745-5563

(載転禁)

川柳雑誌

第十二巻 第六号

定価 五〇円 (送料四円)

B列5号 毎月一回一日発行

昭和三十三年五月廿五日印刷
昭和三十三年六月一日発行

大阪市東区西津田一丁目二番地
編集兼発行 麻生幸二郎
行印刷所 麻生幸二郎

発行所 **川柳雑誌社**
電話 大阪 六〇八一
郵務印鑑 大阪 七五〇五

募集

課題吟募集

楽器 (昔風以四) 西 いわを選
ボス (昔風以四) 直原七面山選
(六月二十日締切)

愛鍵 人 (昔風以四) 福田 安夢選
(七月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 (昔風以四) 麻生路郎選
川柳塔(雜 詠) 北川春葉選
文章(評論・研究・感想其他)
(毎月二十日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

THE SENRYU ZASSHI

NO. 361

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

不眠 昼間療法!



日中のイライラをすくどれる

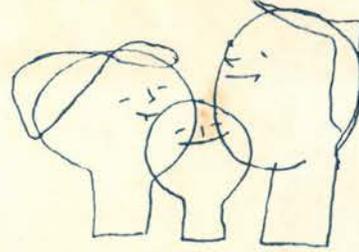
昼間の服用だけで、夜自然に安眠
ができ、日中のイライラや不安感
もとれ、明朗・能率的な生活を送
れる習慣性のない安全な新薬です
スッキリした頭で作句の為にも!

晝はすつきり・夜はぐっすり



東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑥551-2

麻生路郎先生著
川柳とは何か
―川柳の作り方と味い方―
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽―そうしたもろ
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的であるその川柳がいかにして發生し、経
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも
その作り方は、味わい方は―以上を最も
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる
著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雜誌社

送価 二五〇円
三三〇円



東京都新宿区払方町27 振替東京29507



明るい
家庭は
電化で
★御用命はお電話
下されば係員が参
上いたします

日本機械株式会社

本社 大阪市南区末吉橋通四丁目十六番地
御堂筋新橋北詰新橋ビル
電話 船場(25)1856(代表)~7番